

はじめに

勉強方法

文章問題

① 読む

← ー
まず文章を読みましょう。

② 線を引く

← ー
大切だと思うところにチェックをしましょう。

③ 問題を解く

← ー
文章の後についてある問題を解きましょう。

④ 文章の解説動画を見る

← ー
わからないところがあれば、ノートを
とっておきましょう。

※③と④は入れかわってもかまいません。

⑤ 問題の解説動画を見る

← ー
丸つけをしながら、まちがったところを
理解しましょう。

⑥ 復習

授業動画は《文章（本文）の解説 ↓ 問題の解説》の順で展開されているので、①②の段階で難しく思うのであれば、まず④の解説を見てから問題を解いてください。その後、問題を解いてみましょう。

← ー
文章を音読し、意味のわからないところがないか確認。

← ー
また、まちがった問題、正解していたけれどよくわかっていなかった問題をも
どって確認しましょう。

知識問題
ちしき

① 知識の解説動画を見る
かいせつ

——問題を解く前に必ずチャプターの解説
を見てください。

——まちがった考え方で解いてしまうと、ま
ちがった考え方のクセがついてしまうの
で、その前に動画で正しい考え方を理解
してから解きましょう。

② 問題を解く

——考え方を身につけた後に、問題を解いて
みましょう。

③ 問題の解説動画を見る

——丸つけをしながら、まちがった問題の考
え方を理解していきましょう。

④ 復習
ふくしゅう

——まちがった問題をしっかり見直し、やり
直しましょう。自分の考え方がまちがっ
ていないか確認かくにんしたり、覚えないと解け
ないところは暗記したりしてください。

目次

第一講	少年たちの夏①（物語文）	p. 5
第二講	少年たちの夏②（物語文）	p. 10
第三講	春の数えかた（説明文）	p. 15
第四講	高層建築と五重のとう（説明文）	p. 20
第五講	文の組み立て	p. 26
第六講	詩	p. 33
第七講	わすれ物・手紙（物語文）	p. 41
第八講	新聞記事を読み比べよう	p. 46
第九講	立場を決めて討論をしよう	p. 50
第十講	古文、漢文を読んでみよう	p. 56
第十一講	敬語	p. 65
第十二講	注文の多い料理店①（物語文）	p. 71
第十三講	注文の多い料理店②（物語文）	p. 76
第十四講	ことばの教養	p. 86
第十五講	熟語の構成、同音異義語、同訓異字	p. 91
第十六講	ベートーベン（伝記）	p. 99

第十七講	短歌①（百人一首）	p. 105
第十八講	短歌②、俳句	p. 115
第十九講	大造じいさんとがん①（物語文）	p. 126
第二十講	大造じいさんとがん②（物語文）	p. 134
第二十一講	宮沢賢治①（伝記）	p. 141
第二十二講	宮沢賢治②（伝記）	p. 146
第二十三講	人間の覚悟（説明文）	p. 151
第二十四講	花を食べる	p. 157

第一講 少年たちの夏① (物語文)



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

六月にはいつてすぐの土曜日だった。学校からの
帰り道、ぼくは ^① まもるに計画をうちあげた。

「いかだいうても、ぼろ木を組んだような、ちゃちなやつじゃないがぞ。もつと、ずっと、かつこええがぜよ」

ぼくがそういうと、まもるは目をぱしぱしさせて顔をむけた。まもるが、興味 ^{きょうみ} をしめした証拠 ^{しやうこ} だった。すぐにのつてきた。

「外海 ^{そとうみ} へでもでれそうなたとえば船室 ^{せんしつ} があるとか、マストがあるとか、そんながかえ」

まもるは、色白のひたいに、汗 ^{あせ} を光らせていた。やせっぱちのくせに、やたらと汗をかくやつだった。

「屋根ぐらいつけてもええねや」

10

5

「材料は、なにでつくるが」

まもるは、ちよつと不安そうにぼくを見た。

ぼくの頭の中では、すでにいかだはできあがっていた。名前さえ、もう決まっていた。名づけて、ドラゴンホース号だ。竜 ^{りゅう} のような馬。雄々 ^{おおお} しく、ただけしく、四万十川 ^{しまんとがわ} をとぶようにすべっていくのだ。それは、ぼくらの高知県が生んだ偉人 ^{いじん} であるところ、坂本竜馬 ^{さかもとりゅうま} の名前もひっかけている。これ以上の名前があるとは思えない。

「竹でつくるがよ」

「竹？」

「そうぜよ。ひとりのりじゃけん、ぼくとまもると一そうずつつくる」

「一そうずつ！」

^② まもるはそうさけんで、また目をぱしぱしさせた。

〈横山 ^{よこやま} 充男 ^{みつお} 「少年たちの夏」より〉

25

20

15

(1) 線① 「まもるに計画をうちあけた」とあり

ますが、② ③ ④ ⑤ どこでうちあけたのですか。
文中からそれぞれぬき出しなさい。

②

③

(2) 線② 「まもるはそうさけんで、また目をば

しばしさせた」とありますが、このときのまもる
の気持ちを表した言葉としてふさわしいものを次
の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 興奮 (こうふん) イ 興味 (きょうみ) ウ 失望 (しつぼう) エ 感動 (かんとく)

(3) この文章は、どんな場面について書かれていま

すか。それを説明した次の文の□にあてはまる
言葉を、文中からぬき出しなさい。

「ぼく」がまもるに □ で、ひとり

ずつ

をつくる計

画をうちあけた場面。

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

①「ちよつと、見ていこうか」

とまもるは、緊張きんちやうした声でいった。

ぼくはどちらでもよかった。

まもるは、ぼくがはっきりとへんじをしないものだから、もしもじした。そのちよつとした間が、ぼくらをたかつさんのところへいけなくした。そばの竹林から、圭造けいぞうがでてきたのだ。

②「たかつさん。こんなもんでええやろか」

圭造はそういいながら、けずった竹を五、六本さした。学校ではけっして見せない笑顔えがおだったし、あかるい声だった。

「ああ、ちよつといいよ。わるいね。いつもてつだつてもらつて」

「かまへん、かまへん。どうせ、ひまなんやし」

たかつさんは、竹の先をペンのようにして、画用紙に線をいれているらしい。それも太さのちがう竹

15

10

先をいろいろつかつて、どんな線になるかためして
るらしいのだ。まもるは、その技術ぎじゆつをそばで見たい
らしい。

③「ちよつとだけ、いこう」

とまもるは、懇願こんがんするようにいった。

③その声を、圭造がききのがさなかった。ぼくらの
ほうを見て、とたんに眉間みけんにしわをよせた。

圭造はぼくらとのあいだに、それ以上近づくこと
をゆるさない空気を張はつた。

〈横山 充男「少年たちの夏」より〉

25

20

(1) ——— 線① 「ちょっと、見ていこうか」とありま

すが、まもるは何を「見ていこう」といつているのですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たかつさんに線のいれかたを学んでいる圭造の様子。

イ そばの竹林で竹をけずっている圭造の様子。

ウ たかつさんが竹先をつかってかいた絵。

エ たかつさんが竹先をつかって線をかく技術。



(2) ——— 線② 「圭造」とありますが、「圭造」はど

んな人物ですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」やまもると同じ学校に通っているが、

学校では人と親しもうとしない人物。

イ 「ぼく」やまもると同じ学校に通っていて、

いつも笑顔であかるい人物。

ウ ただ一人の友人であるたかつさんにおこられ

ないようにと、おどおどしている人物。

エ 用事を言いつけるたかつさんに対して、いつもさからえない内気な人物。



(3) ——— 線③ 「その声を、圭造がききのがさなかつ

た」とありますが、そのときの圭造の気持ちとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二人が来てくれたのでうれしく思っている。

イ 呼んでいない二人がいるので不機嫌ふきげんになっている。

ウ ちょうど人手が足りていなかったので、安心して



第一講・確認テスト

正しい送りかなを選びなさい。

1 みずから

ア 自

イ 自ら

ウ 自から

エ 自ずから

2 かならず

ア 必

イ 必ず

ウ 必らず

エ 必ならず

3 すくない

ア 少

イ 少い

ウ 少ない

エ 少くない

4 もっとも

ア 最

イ 最も

ウ 最とも

エ 最つとも

5 あらわれる

ア 現る

イ 現れる

ウ 現われる

エ 現らわれる

第二講 ・ 少年たちの夏② (物語文)



一 題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

友達と四十万十川をいかだでくだる途中、「ぼく」は渦につっこんでいった。

一瞬、ふわっとくような感じがして、どんと

A がきた。ドラゴンホース号は、天に昇るみ

たいに頭を持ちあげ、それから水面にばしゃつとお

ちた。ぼくはひつしてしがみついた。ドラゴンホー

ス号は、はげしくからだをふるわせて、いきなりし

ずかになった。ぼくとドラゴンホース号は、渦のそ

とにうかんでいたのだ。

息がはあはあしていた。その息の底から、なんだ

かめちやくちやうれいものがこみあげてきた。

「おおおっ」

渦をぬけたとたん、ぼくは声をあげた。安全を感

10

じたとたんにあげる、恐怖の叫びだった。それはまた、B の雄叫びでもあった。心臓が破裂しそ

うにいたかった。ドラゴンホース号は、四十万十川の

川上に頭をむけていた。反転したわけだ。岬のさき

で、びっくりした目でぼくを見ているまもと圭造

がいた。

「やったあ」

と、まもるがいった。

「ほっほお」

と圭造が手をたたいた。

四十万十川の流れに、ドラゴンホースがゆつくりと

川下に頭をむけはじめていた。

25

20

15

まもと圭造は、岬からすつとんでいった。」

〈横山 充男「少年たちの夏」より〉

30

(1) A ・ B に入る言葉としてふさわしい

ものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア よろこび イ 悲しみ ウ 発見

エ 不安 オ 衝撃

A

B

(2) — 線「いきなりしずかになった」とありますが、ドラゴンホース号がしずかになったのは、なぜですか。文中の言葉を使って答えなさい。

(3) 「 」の部分は、どのような場面ですか。ふ

さわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まもと圭造が「ぼく」が無事に渦からぬけたことを大人に知らせようと走っていく場面。

イ 「ぼく」の様子にしげきを受けて、まもと圭造もいかだで渦の中へ入ろうとする場面。

ウ 早く「ぼく」のいるところへ行こうと、まもと圭造がドラゴンホース号を川下における場面。

面。

エ 「ぼく」が渦からぬけたのを喜んで、まもと圭造が岬から川へ飛びこむ場面。

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

太陽が、ちょうど真上のところにあった。ぼくらは、三そのドラゴンホースを見送ったあと、^①灯台の下で昼ごはんにした。あんぱんだけだったけど、ぼくらは満足していた。水筒のお茶は、どんなジュースよりもおいしかった。

5

「ぼくな、中学は高知市にいくけれど、
とつぜん、まもるがそんなことをいった。」

A

「親の仕事をつぐのとちがうが。歯医者には、金もうけできるがやろ」

「ぼくは、絵を描きたい。歯医者には、おねえちゃんになってもろうたらええ」

10

「たかつさんみたいな、絵描きさんか」

「まもるも、いくんか。」

B

と圭造がつぶやいた。

さびしくなるなんて、圭造がいうとは思わなかった。

15

「こうちゃんは、どんなおとなになりたいか」

と、まもるがまじめな顔できいた。

「ぼくは、まだ決めちよらん」

「ほんなら、圭造は？」

「おれか。おれは、ちゃんとしたおとなになる」

20

「ちゃんとした？」

圭造は、さいごのパンのひと口をのみこんで、はずかしそうにいった。

「うん。なんしか、ちゃんとしたおとなや。ちゃんとした人間や」

25

ぼくは、圭造はいまでもちゃんとした人間だと思った。

「ちゃんとした人間か」

と、まもるはしみじみとつぶやいた。」

「圭造は……」

30

ちゃんとしているよといいかけて、
ばをのみこんだ。

そんなこと、ぼくが決めることじゃない。

みやあ！ と白いカモメが鳴き、ぼくらの上をと

んでいった。

〈横山 充男「少年たちの夏」より〉

35

(1) 線①「灯台の下で昼ごはんにした」とあり

ますが、このときの「ぼくら」の気持ちがわかる
言葉を、六字でぬき出しなさい。

(2)

・

 に入る言葉としてふさわしい

ものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 歯医者にはならんかもしれん

イ みんながんばってるな

ウ おれひとり、さびしくなるな

エ 絵描きさんにはならんかもしれん

A

--

B

--

(3) 「

」の部分では、三人はどんな話をしてい

ますか。それを説明した次の文の

にあてはま
る言葉を、文中からぬき出しなさい。

将来^{しょうらい}

になるかと

いう話。

(4) 線②「ぼくはことばをのみこんだ」とあり

ますが、それはなぜですか。文中の言葉を使って
答えなさい。

--

第二講・確認テスト

送りがなのまちがっているものを選びなさい。

1 ア 起きる
イ 計る
ウ 当る
エ 表す

2 ア 新しい
イ 悲しい
ウ 楽しい
エ 美しい

3 ア 断る
イ 省る
ウ 表す
エ 正す

4 ア 増える
イ 支える
ウ 交える
エ 営なむ

5 ア 断る
イ 導く
ウ 図る
エ 報る

第三講 ・ 春の数えかた（説明文）



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

1 なぜ自然はこんなにうまくめぐっているのだろうか？ * 生物学者にとっては当然興味をそえられる問題だ。

2 今年は寒かったからサクラの開花はかなりおくれたが、暖い年にはふだんより早く花が咲く。

A 、寒い、暖いが開花の時期をきめていることは確かである。

3 B サクラは、冬の間からつぼみがふくらんでくる。その時期にはまだ寒いから、つぼみのふくらみは暖さによるものではない。そもそも暖くなってからつぼみをふくらませ始めたのでは間に合わない。

10

4 このときにもう、来年の花が作られはじめているのである。サクラの花は暑い夏に作られて、寒いときにふくらみ、暖くなって開くのだ。その丹念な*用意周到さ！

15

5 いずれにせよ、植物はちゃんと季節を知っている。そして、一年のきまった時期に花を咲かすよう、厳密なタイム・スケジュールが組まれている。

20

〈ひだか 敏隆「春の数えかた」より〉
*生物学者は動物や植物などを研究する学者。

*丹念は心をこめていいねいすること。

*用意周到は用意が十分にとのっていること。

(1) この文章を次のように大きく三つに分けるとすると、どのように分けるのがよいですか。それぞれ、段落番号を答えなさい。

・一つ目（話題の提示）

・二つ目（くわしい説明）

・三つ目（まとめ）

(2)

A

B

に入る接続語としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ また ウ たとえば

エ では オ けれど

A

B

(3) 次の一文を文中にもどすとすると、どの段落の最初にもどすのがよいですか。段落番号を答えなさい。

・じつはサクラが花の芽を作るのは、前年の夏である。

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

1

①なぜ自然はこんなにうまくめぐっているのだろうか？ *生物学者にとつては当然興味をそそられる問題だ。

2

②今年は寒かったから、サクラの開花はかなりおくれたが、暖い年にはふだんより早く花が咲く。だから、寒い、暖いが開花の時期をきめていることは確かである。

3

③けれどサクラは、冬の間からつぼみがふくらんでくる。その時期にはまだ寒いから、つぼみのふくらみは暖さによるものではない。そもそも暖くなってからつぼみをふくらませ始めたのでは間に合わない。

4

④じつはサクラが花の芽を作るのは、前年の夏である。このときにもう、来年の花が作られはじめてるのである。サクラの花は暑い夏に作られて、寒いときにふくらみ、暖くなって開く

15

10

5

5

⑤のだ。その *丹念な *用意周到さ！
いずれにせよ、植物はちゃんと季節を知っている。そして、一年のきまつた時期に花を咲かすよう、厳密なタイム・スケジュールが組まれている。

20

〈日高 敏隆「春の数えかた」より〉

*生物学者⇨動物や植物などを研究する学者。

*丹念⇨心をこめて、いいにすること。

*用意周到⇨用意が十分にととのっていること。

(1)

——線①「なぜ自然はこんなにうまくめぐっているのだろうか？」とありますが、この問いかけに対する答えを述べた次の文の□□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

植物は

を知っていて、厳密な

が組まれているから。

(2)

——線②「サクラの開花」とありますが、「開花」の説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア サクラのつぼみは暖くなつてからふくらみはじめる。

イ 開花の時期は暖いと早まるが、つぼみのふくらみには関係ない。

ウ サクラのつぼみは寒い冬の間はふくらまない。

エ 開花の時期は、気温の高低によってきまるわけではない。

(3)

——線③「その丹念な用意周到さ！」とありますが、どのような点が「用意周到」なのでしょうか。それを説明した次の文の□□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

サクラは

の花のために、

の夏には

を作りはじめている点。

第三講・確認テスト

次の□に「不」「無」「非」「未」を入れて言葉を完成させなさい。

1 □色

ア 不
イ 無
ウ 非
エ 未

2 □常識

ア 不
イ 無
ウ 非
エ 未

3 □来

ア 不
イ 無
ウ 非
エ 未

4 □足

ア 不
イ 無
ウ 非
エ 未

5 □安

ア 不
イ 無
ウ 非
エ 未

第四講

・高層建築と五重のとう(説明文)



一 題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

1 日本で最古の五重のとうは、奈良県の法隆寺

にあり、千三百年以上前のものといわれている。

このように五重のとうの歴史は古いが、それが地しんや強風でたおれたという話はめったに聞

かない。昔から伝えられた技術や方法は、科学

の発達した今日でも、意外に合理的なものであ

る。では、五重のとうには、地しんや強風にた

えるための、どんなひみつがかくされているの

だろうか。

2 五重のとうは、木造の建物である。ところで、

自然のじゅ木は、やわらかくて、少し曲げたく

らいでは折れない。この、折れないでしなうと

いう性質を、「しなやかだ」という。つまり、五

重のとうの材料は、しなやかな木材である。

3 五重のとうには、木材の組み合わせ方、すな

わち木組みにもくふうがある。とうの中心に、

一階から五階まで通した太い柱があるが、それ

以外は二つの階にわたって通してある柱はない。

一階ごとに独立の、しかもかなり複雑な木組み

をつくって、ただ乗せてあるだけである。この

ように、各階が固く結び付いていないので、外

から力がかかったときも、つぎ目がこわれるこ

となく、建物全体がしなう。すなわち、五重の

とうは、しなやかなつくりをもつ建物である。

4 さらに、五重のとうには、横にはり出した屋

根を支える仕組みにもひみつがある。各階の柱

は、上層からの重さと屋根の重さを支えている

が、そのつくりが片仮名の「イ」に似ていて、

かたむいたてんびんのような形になっている。

しかも、柱のつぎ目が、ちょうどてんびんの支^し点^{てん}のようにゆるく結び付いているために、屋根は、鳥が羽ばたきをするように、ゆっくり上下にゆれるのである。これも、一種のしなやかさである。

〈高^{たか}木^き 隆^{りゅう}司^じ 「高層^{けんちく}建築と五重のとう」より〉

30

(1) 線① 「日本で最古の五重のとう」は、どれ

ぐらい前のものですか。文中からぬき出しなさい。

(2) 線② 「昔から伝えられた技術や方法」とあ

りますが、この文章では五重のとうのどんな点に注目していますか。 あくえにあてはまる

言葉をそれぞれ、文中からぬき出しなさい。

あ	い	う
のひみつ	のひみつ	のひみつ
性質		
え		

あ	い	う	え
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

(3)

③段落の中で、筆者が特に注目しているのは
どんなところですか。ふさわしいものを次の中か
ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大部分の柱が、複雑な木組みになっていると
ころ。

イ 大部分の柱が、一階ごとに独立しているところ。

ウ とうの中心に、一階から五階まで通した太い
柱があるところ。

エ 五重のとうの各階が、固く結びついていると
ころ。



二題目

5

ところで、建物全体がしなったり、屋根がゆれたりすると、木組みには、どうしてもわずかなすき間ができる。すると、木組みのあちこちで木材どうしがこすれ合って、ギシギシときしむことになる。五重の^①とうがたおれない理由は、

5

6

五重のとうに、地しんや風などのはかいの力がかかって、ゆれ始めたときのことを考えてみよう。とうのしなやかさと屋根のつくりのために、ゆれの勢い^{いきおい}がとうの各部分に伝わっていく。

10

ゆれの勢いは、建物全体としては大きくても、それがとうの各部分に分けられたとき、各部分のゆれの勢いは小さくなる。

A

は、木組みのきしみのために、勢いが弱められてしまう。これは、ぶらんこの支点^{してん}にきしみがあると、ぶらんこがすぐ止まってしまふのと、ちょうど同じ理由である。

15

B

、五重のとう

7

では、地しんや強風のときでも、木材が折れたり、木組みが外れるようなことは起きないのである。

20

自分が建てた五重のとうの中に入ってみた人の話をしようかいしよう。ギーギー、バリバリと木材のきしむ音がし、今にもたおれてしまうのではないかと思うほど、建物全体が弓なりにかたむく。中心の高い柱は、上のはしが大きく円をえがき、根もとのところでは、土台とこすれ合って、ゴボゴボとお湯がにえたぎるような音をたてるのだそうだ。しかし、とうも、この人も無事だった。

25

8

全体がしなやかさをもち、木組みにきしみが生じることが、地しんや強風に対する強さを生む――これが五重のとうのひみつである。

30

〈高木^{たかき} 隆司^{りゅうじ}「高層建築と五重のとう」より〉

(1) 線①「五重のとうがたおれない理由」を説

明した次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

地しんや風などの

が

かかっても、
□□□□□
のために勢いが弱め
られるから。

(2) A・B にあてはまる言葉としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ しかし
ウ こうして エ さらに

A □
B □

(3) 線②「これ」は、何をさしていますか。文中からさがし、初めと終わりの五字を答えなさい。

(、や。をふくまない。)

□□□□□

、
□□□□□

第四講・確認テスト

次の□に「不」「無」「非」「未」を入れて言葉を完成させなさい。

1 □可能

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

2 □解決

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

3 □理解

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

4 □服

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

5 □日常

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

第五講 ・ 文の組み立て

ー、主語と述語（しよご と じよご）

文は、大きく分けて【主語】と【述語】から成り立っている。

【主語】

「だれが（は）」・「何が（は）」に当たる言葉。

【述語】

「どうする」・「どんなだ」・「何だ」に当たる言葉。

主語	述語（文末）
うは	どうする
うが	どんなだ
うも	何だ

例

兄が	行く。	「だれが」＋「どうする」
花が	きれいだ。	「何が」＋「どんなだ」
父は	会社員だ。	「だれは」＋「何だ」

① 次の文の主語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) この はさみは よく 切れる。

(2) 真夏の 太陽の 光が 照りつける。

(3) ここには 毎年 わたり鳥が 来る。



② 次の文の述語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 日本は海に囲まれた国です。

(2) 妹は来年小学生になる。

(3) ここにあったのか、自転車のかぎは。

③ 例にならって、次の文の主語と述語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、主語・述語がない場合は、×と答えなさい。

(1) 中学生の兄はサッカー部のキャプテンだ。

主語	<input type="text"/>
述語	<input type="text"/>

(2) お祭りの行列がゆっくりと通り過ぎる。

主語	<input type="text"/>
述語	<input type="text"/>

(3) かぎをなくして夜まで家に入れなかった。

主語	<input type="text"/>
述語	<input type="text"/>

(4) ぼくがいちばん好きな教科は国語です。

主語	<input type="text"/>
述語	<input type="text"/>

(5) とってもおいしいね、このケーキは。

主語	<input type="text"/>
述語	<input type="text"/>

4 次の文の主語・述語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、主語・述語がない場合は、×と答えなさい。

(1) 父は 毎朝 電車で 新聞を 読む。

主語
述語

(2) 雪山で 見た 女の 顔は 白かった。

主語
述語

(3) 風で 飛ばされないよう テントに ロープを 張った。

主語
述語

(4) この 町には 大きな 図書館が ない。

主語
述語

(5) 駅前の 白い 建物は 高校の 校舎です。

主語
述語

(6) 落ち葉を ふみながら 山道を ゆっくり 歩いた。

主語
述語

2、
修飾語

「どんな」「どのように」のように、文の中でほかの言葉をくわしく説明する働きを持つ。

例 赤い花が さく。

花が きれいに さく。

ほかにも、「いつ」「何を」「何の」「何で」などに当たる言葉も修飾語である。

1 次の文から修飾語をすべて選び、記号で答えなさい。

(1) 屋根に うっすらと 白い 雪が 積もった。

(2) 白い 馬が 草原を さっそうと かける。

② 次の——線の言葉が修飾している言葉をぬき出
しなさい。

(3)		(2)		(1)	
②	①	②	①	②	①
元気な	元気に	明日までの	明日まで	えのぐで、	えのぐで、
顔を	顔を	わり引きが	わり引きが	犬を	犬を
見せる。	見せる。	ある。	ある。	かく。	かく。
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

③ 次の文の□の言葉が修飾している言葉をそ
れぞれ選び、記号で答えなさい。

(3)	(2)	(1)
ちようど	川で	海岸で
始業の	つかまえた	きれいな
ベルが	魚を	貝殻を
鳴った	学校で	一つ
ところ	飼う。	拾った。
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

4

次の文の□の言葉を修飾している言葉をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 山道の大きな木の□下で雨宿りをした。

(2) すぐにまどの近くの□席が空いた。

(3) 休日の昼間の学校は□とても静かだった。

第5講・確認テスト

次の□に「性」「然」「的」「化」を入れて熟語を
作りなさい。

1 病 □

ア 性
イ 然
ウ 的
エ 化

2 緑 □

ア 性
イ 然
ウ 的
エ 化

3 当 □

ア 性
イ 然
ウ 的
エ 化

4 個 □

ア 性
イ 然
ウ 的
エ 化

5 温 暖 □

ア 性
イ 然
ウ 的
エ 化

第六講 ・ 詩



1、詩の種類

① 形式上の分類

- ・ 定型詩…きまった音数をくり返す詩。
- ・ 自由詩…一行の音数にきまりがなく、自由な形で書かれた詩。

② 用語上の分類

- ・ 文語詩…昔の言葉（文語）で書かれた詩。
- ・ 口語詩…現在使われている言葉（口語）で書かれた詩。

2、詩の主な表現技法

① 比喩……ものごとをほかのものにたとえる

技法。

② 擬人法……人間でないものを人間のようにたとえる技法。

とえる技法。

③ くり返し……同じ言葉をくり返す技法。

④ 倒置法……言葉の順序を逆にして、意味を強める技法。

める技法。

⑤ 体言止め……行の終わりを名詞（ものやこと）で止める技法。

らの名前）で止める技法。

⑥ 呼びかけ表現

一 題目

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

い。

ふるさと

室生 犀星

雪あたたかくとけにけり

しとしとしと融^とけゆけり

ひとりつつしみふかく

やわらかく

木の芽に息をふきかけり

もえよ

a のうすみどり

もえよ

a のうすみどり

10

5

(1) この詩の①形式と、②使われている言葉（用語）

を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 定型詩 イ 自由詩

ウ 文語詩 エ 口語詩

①

②

(2) 二か所の a に共通して入る言葉を、詩の

中から三字以内でさがし、ぬき出なさい。

(3) この詩は何をよんだ詩ですか。□にあてはま

る漢字一字を、それぞれ考えて答えなさい。

から

への移^{うつ}り変わり。

二 題目

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

時

堀口 大 學

よろこびの時は短かい
夢よりもなおも儚ない
束の間もこれより長い

よろこびを時が持ち去る
かなしみを時が置き去る

かくてこの心に残る
かなしみが心にしみる
何時までも 明日も明後日も

5

(1) この詩に用いられている表現技法を次の中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 体言止め
イ くり返し
ウ 倒置法
エ 比喩

(2)

——線「心に残る」とありますが、何が心に残るのですか。詩の中から五字以内でさがし、ぬき出しなさい。

--

三題目

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

準備

高階 杞一

1

A のではない

① 準備をしているのだ

飛び立っていくための

2

B のではない

② 測ろうとしているのだ

風の向きや速さを

3

初めての位置

初めての高さを

こともたちよ

4

おそれはいけない

この世のどんなものもみな

10

5

5

「初めて」から出発するのだから

落ちることにより

初めてほんとうの高さがわかる

うかぶことにより

初めて

雲の悲しみがわかる

15

(1)

A

B

に入る言葉としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

い。

ア

怒^{おこ}っている

イ

見^みている

ウ

待^{まち}っている

エ

笑^{わら}っている

A

☐

B

☐

(2)

線①と

線②で

使^{ひようげんぎ}われている表現技法^{ぽうげんぎほう}を

答えなさい。

(3)

第3連と第4連

の説明としてふさわしいものを次の中から二つを選び、記号で答えなさい。

ア

同じような表現をならべることで、まとまりごとにリズムを出している。

イ

同じ言葉をくり返すことで、「初めて」の大切さを強調している。

ウ

行末^{ぎょうまつ}を名詞^{めいし}で終えることで、出発の風景に余情^{じようじやう}をあたえている。

エ

伝えたい相手を明らかにし、「初めて」をおそれはいけないというメッセージを発している。

る。

☐
☐

(4)

この詩の中から、擬人法^{ぎじんぽう}が使われている行を一つか所さがし、ぬき出^{ぬきだ}しなさい。

四題目

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

忘れもの

高田 敏子

1 入道雲にのって

夏休みはいつてしまった

「サヨナラ」のかわりに

すばらしい夕立をふりまいて

5

2 けさ 空はまっさお

木々の葉の一枚一枚が

あたらしい光とあいさつをかわしている

3 だがキミ！ 夏休みよ

もう一度 もどってこないかな

忘れものをとりにさ

10

4 迷子のセミ

さびしそうな麦わら帽子
それから ぼくの耳に
くっついてはなれない波の音

15

(1) — 線『サヨナラ』のかわりに」とありますが、

どのようなことが起きたのですか。それを説明した次の文の□□にあてはまる言葉を、詩の中からぬき出さない。

の終わりの日に、

が

ふったということ。

(2) 第4連の説明としてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏休みが置いていった「忘れもの」を表している。

イ 夏休みといっしょに去っていった夏の思い出を表している。

ウ 人間でないものを人間のようにたとえて表現している。

エ よびかけの表現を使って、作者の気持ちをうつたえている。

(3) この詩の主題としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たくさんの思い出ができた夏休みのすばらしさ。

イ 夏休みが終わるころの空や木々などの風景の美しさ。

ウ 夏休みが終わることへのどうしようもないさびしさ。

エ 夏休みがもどってこないことへのいらだち。

第六講・確認テスト

次の□に「性」「然」「的」「化」を入れて熟語じゅごを作つくりなさい。

1 強□

ア 性 イ 然 ウ 的 エ 化

2 一本□

ア 性 イ 然 ウ 的 エ 化

3 自□

ア 性 イ 然 ウ 的 エ 化

4 映画□

ア 性 イ 然 ウ 的 エ 化

5 感受□

ア 性 イ 然 ウ 的 エ 化

第七講 ・ わすれ物・手紙（物語文）



【一題目】 次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

恵の家は、団地の東の住宅地にあります。純子の家は、団地の西外れにならぶ棟です。すぐ先の十字路が、この団地のほぼ中心ですが、十字路を向こうへわたって、まっすぐ五、六分ほど行くと、純子の家に着くのです。

5

「早く行かなくちゃ。リボン―フラワーの作り方、最初から教わりたいものね。」

独り言を言いながらかけ出し、くぼみにたまった雨水をとびこえた恵の足は、一しゅん、すくみました。

10

【右手から十字路へと、勢いよく走ってきた白い自動車。そして、目の先の横断歩道へちよこちよこと出ていく、ニ才ほどの男の子。

恵が男の子をかかえこんでとびのくのと同時に、十字路の中ほどで、自動車が、はげしいブレーキの音を立てました。」

15

「あぶない！ 小さい子とは、ちゃんと手をつないでいてくれよつ、お姉ちゃんのくせに。」

運転手が、顔をつき出してどなりました。

（この子のお姉ちゃんじゃないわよ、わたし。）

20

言い返したい気もしましたが、どなられたはら立ちよりも、もつと熱いものがこみ上げて、くちびるがふるえていました。

「あぶなかったのよ、ぼく。ほらね、あの信号が赤いときは、ぜったいに、わたっていったやだめなのよ。」

25

ひと息に言ってから、恵は、少し気持ちを静めて、男の子に話しかけました。

〈古世古 和子「わすれ物」より〉

(1) この文章は、だれが、どこへ行こうとしていた
ときの話ですか。

だれが

どこへ

--	--

(2) — 線① 「すくみました」とありますが、どう

いうことですか。ふさわしいものを次の中から一
つ選び、記号で答えなさい。

ア どうしようかとまようこと。

イ こわさで、動けないこと。

ウ こわさで、ふるえること。

エ こわさから、後ろへさがること。

--

(3) 【 】の部分では何が起こったのですか。□に

あてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

男の子が勢いよく走ってきた

にひかれそうになった

ので、恵が

ことで男の子を助けた。

(4) — 線② 「もっと熱いもの」とはどんなもので

すか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記
号で答えなさい。

ア 危険な出来事から受けたしやうげき。

イ 男の子に対してのいかり。

ウ 男の子をほうっておく親に対してのいかり。

エ となった運転手に対してのうらみ。

--

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

「今日は八月十五日だ。終戦記念日だ。」

おじいちゃんは、手に持った手紙に目をやったまま言った。

「終戦記念日ってのは、戦争が終わった日のことなんだ。おじいちゃんは、日本が第二次世界大戦を終えた

きつちゅう

日、九州の病院にいたんだ。兵隊として中国の南部に

ちゆうぐく

いたんだけど、大砲のたまのかけらがかたに当たって

たいほう

大けがをして、中国から、小倉の陸軍病院に送り帰

こくら

されたんだ。それから三か月後に、戦争が終わった。」

大けがをして、中国から日本へ送り帰されること

が決まった日、同じ戦場にいた友達が、^①ないしよ

で、手紙をおじいちゃんに預け、

あず

「もし、ぼくが生きて帰れなかったら、この手紙を
ぼくの両親にわたしてくれよ。」

と言ったそうだった。

戦場から、家族や友達に出す手紙は、すべて、ど

15

んなことが書いてあるのかを調べられるのだと、お
じいちゃんはタケオに説明してくれた。

「戦争に反対するようなこととか、いくじのないこ
とを書いてある手紙は、取り上げられてしまうから、
兵隊たちは、手紙には、本当のことは書けないんだ。」

その友達は、自分が生きて帰れないだろうと予感
して、ありのままのことを書いた手紙、おじいちゃ
んにそつと預けたのだった。

もし、^②いろいろな事情できみの両親にわたせな

じじう

かったら、どうしたらいいのかと、おじいちゃんが、
その友達に聞くと、

「そのときは、きみが読んでからすててくれ。」

友達は、そう言ったそうだった。

「いろんな事情って、どんなこと？」

と、タケオは聞いた。

例えば、自分のけがが治らなくて、このまま死ん
でしまったり、友達の両親と会えないまま、何年もたっ
てしまったりしたときだと、おじいちゃんは言った。

〈宮本 輝「手紙」より〉

みやもと

てる

30

25

20

(1) おじいちゃんがタケオに戦争の話をしたのはいつですか。

(2) 線①「ないしょで」手紙をわたしたのはなぜですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦場から手紙を出すことは許されなかったから。

イ 戦場から手紙を出すには許可が必要だったから。

ウ 戦場から個人的な手紙は出せなかったから。

エ 戦場からの手紙はすべて調べられたから。

(3) 友達の手紙にどのようなことを書いていましたか。文中から八字でぬき出しなさい。

(4) 友達はどうのような気持ちでその手紙を書いたのですか。文中の言葉を使って答えなさい。

(5) 線②「いろんな事情」の内容がよく表れている一文を文中からさがし、初めの五字を答えなさい。

第七講・確認テスト

次の中から主語を選びなさい。

1 僕^アの かつ^イている ネコ^ウは かわ^エい。

2 君^アこそ この クラス^イの 学級委員^ウ長に
ふさ^エわしい。

3 その 本^イは とても おも^エしろいよ。

4 昨日^アは だいじょうぶ^イだった、 きみ^ウの
お姉^エさんは。

5 白^アい 花^イが もう^ウすぐ しお^エれてしま^ウい
そう^エだ。

第8講

・新聞記事を読み比べよう



新聞記事の構成

- ① トップ記事 第一面の目だつところに置かれた、最も大切な記事。
 - ② 見出し ひと目でわかるように、記事の内容を短くまとめた言葉。
 - ③ リード 本文の内容を短い文章でまとめたもの。
 - ④ 本文 できごとの内容がくわしく書かれた、記事の文章。
 - ⑤ 写真・図・解説 記事の内容をよりくわしく伝えるためのもの。
- 同じ話題をあつかった記事でも、見出しの内容や、記事・図・写真などの大きさや配置により、印象がことなる。

一題目 次の二つの新聞記事を読んで、あとの問いに答えなさい。

・A社の新聞記事

試験期間終了 徴収金3412万円

山梨、静岡両県が協力し、富士山で十日間、入山料の試験徴収を行った。予想を上回る賛同があり、計約3412万円集まる結果となったが、本格的導入に向けて残された課題は多い。

富士入山料 残された課題

今回の試験期間では、登山者を対象に一人千円の協力を求め、大勢の協力を得る結果となったが、金額に関しては「ちようど良い」「もっと高く」など、様々な声が寄せ

られている。また、徴収金の具体的な使用道や、入山料を任意にするいは強制にするのか、などについても発表されておらず、検討すべき課題は多く残されている。

・B社の新聞記事

富士山協力金 3412万円

世界文化遺産の富士山で、試験的に行われた「富士山保全協力金」は、十日間で3万4327人が計約3412万円を支払い、予想を大幅に上回る結果となった。

富士山では「環境保全の資金確保」を目的とし、入山料として、山頂を目指す登山者を対象に、一人千円の支払いを呼びかけた。支払いは任意であったが、予想以上に関心

が高く、多くの協力者を得る結果となった。山梨、静岡両県では、本格的導入に向けて、登山者からの意見を参考に、今後いつそう力を入れたいと語っている。

〈出題者書きおろしによる〉

(1) 線「山梨、静岡両県が協力し」から始まる

部分は、新聞記事の構成上、どのようによばれていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 見出し
イ コラム
ウ リード
エ 本文

(2) B社の新聞記事の [] にあてはまる言葉としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 富士山 世界文化遺産登録決定
イ 予想上回る 3万4000人が協力
ウ 徴収金 3412万円集まる

(3) B社の新聞記事に写真のをのせるとしたら、どのような写真がよいですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 入山料を支払う登山者たちの写真。

イ 富士山の美しさがわかる遠景写真。

ウ 富士山のゴミを拾う登山者の写真。



(4) 二つの記事を読み比べたとき、内容的にどのようなちがいがありますか。そのちがいをまとめた

次の文の() ①・②にあてはまる言葉を、

新聞記事の中の言葉を使ってそれぞれ答えなさい。

二つの記事はともに、富士山の入山料の徴収を試験的に行ったことについて書かれているが、A社の新聞記事は() ①() ことを中心に、B社の新聞記事は() ②() ことを中心に記事をまとめている。

①

--

②

--

第八講・確認テスト

次の中から述語を選びなさい。

1 今日^アは 楽^イしみにして^ウいた ぼ^ウくの 誕^エ生^{たんじょう}
日^ビだ。

2 私^アは 青^イい 花^ウを 摘^エんで帰^ツった。

3 とて^アも 気^イにな^ウるよ、 誰^ウが 来^エたのか。

4 交^ア差^サ点^テで ぼ^イくは 友^ウだちと 待^エち合^ワわ
せ^セた。

5 私^アは まち^イが^ツつて 電^ウ話^ワを かけ^エてし
ま^マった。

第9講・立場を決めて討論をしよう



一題目 次の討論の一部を読んで、あとの問いに答えましょう。

司会 これから討論を始めます。論題は

「 」です。この討論は黒板に書いた順序で進めます。

それではまず、賛成グループから主張してください。

5

賛成 ぼくたちは、論題に賛成です。賛成の理由は三つです。一つ目は、くり返し使えて環境に良いからです。二つ目は、飲み物の温度を保てるからです。三つ目は、自分に合った量を用意できるからです。以上の理由から、ぼくたちは論題に賛成します。

10

反対 わたしたちは、論題に反対です。その理由は

三つです。一つ目は、水とうは空になっても重くてかさばるからです。二つ目は、清潔に保つために手間がかかるからです。三つ目は、こわしたりなくしたりすることがあるからです。したがって、わたしたちは論題に反対です。

15

〈作戦タイム〉相手への質問を考える。

司会 反対グループは、賛成グループの理由に対して、質問してください。

20

反対

水とうはくり返し使えて環境に良いという理由を挙げていましたが、こわれたらごみになってしまいます。一方、ペットボトルは、リサイクルできます。環境に良いことは水とうだけの良さではないと思いますが、どうですか。

25

賛成

七月一日の新聞によると、ペットボトルにはリサイクルされていないものが十万吨以上あるそうです。くり返し使うことのできる水とうのほうが環境に良いと思います。……

〈教科書書きおろしによる〉

(1)

□にあてはまる今回の討論の論題としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 校外学習に飲み物を持っていくときは、水と
うを使うべきである。

イ 校外学習に飲み物を持っていくときの容器
は、自由にすべきである。

ウ 校外学習に飲み物を持っていくときは、ペッ
トボトルを使うべきである。

☐

(2)

——線「水とうはくり返し使えて環境に良いと
いう理由を挙げていましたが」とありますが、こ
れと同じ立場から挙げられているほかの理由を二
つぬき出しましょう。

(3) 賛成グループが自分たちの主張の正しさを示すために、理由のうらづけとなる具体的な事実を述べている一文をぬき出し、初めの五字を答えましょう。

二題目

次の文章は、「校外学習に飲み物を持っていくときは、水とうを使うべきである。」という論題に対する西村さんの意見文です。これを読んで、あとの問いに答えましょう。

わたしは、「校外学習に飲み物を持っていくときは、水とうを使うべきである。」というろん題に賛成です。

賛成する理由は三つあります。

一つ目は、水とうを使うことは、かん境に良いからです。例えば、ペットボトルは、中身を飲んだ後はごみになってしまいます。それに対して、水とうはくり返し何度でも使えます。

二つ目は、水とうには、飲み物の温度を保てるものがあるからです。冷たい飲み物は冷たいまま、温かい飲み物は温かいまま持っていくことができます。

三つ目は、水とうは、一人一人もようがちがうので、ほかの人の飲み物とまちがえることがないから

です。

、わたしは、校外学習に飲み物を持っていくときは、水とうを使うべきだと考えます。

〈教科書書きおろしによる〉

(1) 西村さんは、「校外学習に飲み物を持っていくときは、水とうを使うべきである。」という論題に対して、どのような立場から意見を述べていますか。二字で答えましょう。

(2)

中から選び、記号で答えましょう。

ア しかし イ したがって
ウ また エ なぜなら

(3) 西村さんが意見の理由として述べていることは、どんなことですか。三つ答えましょう。

--	--	--

(4) 「校外学習に飲み物を持っていくときは、水と
うを使うべきである。」という論題に対し、西村
さんとは反対の立場に立って意見文を書きましよ
う。ただし、「わたし（ぼく）は、このろん題に
くです。」という文で書き出すこと。

A full page of graph paper featuring a uniform grid of small squares formed by dashed lines. The grid covers the majority of the page area, leaving narrow margins at the top, bottom, left, and right edges.

第九講・確認テスト

次の二重傍線部が修飾している箇所を選びなさい。

1 私^アは 両手^ニで た^イくさんの 花^ウを 持^エつた。

2 友人^アは い^ニつも 弟^イの 面^ウ倒^ムを 見^エてい

3 ぼく^アの 学^ニ校^ニの 休^イみ時^ニ間^ニは 毎^ウ日^ニ 決^エ

4 怒^オった 友^ア人^ガが い^イきなり ボ^ウール^ヲを 投^エげた。

5 少^シし や^アやこ^シしい 話^イを 友^ア人^ガが わ^ウかり

や^ヤすく 話^エしてく^レれた。

第十講・古文、漢文を読んでみよう



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えま

しょう。

今は昔、竹取^{たけとり}のおきな^①といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづ^{よろづ}のことに使^いひけり。名をば、さぬきのみやつことなむ^{なむ}いひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ^{なむ}一筋^{ひとすじ}ありける。あやしがりて、寄りて見るに、つつの中光りたり。それを見れば、三寸^{さんずん}ばかりなる人、いとうつくしう^{しゅう}てゐたり。

〈「竹取物語」より〉

〈意味〉

昔、竹取のおじいさんという人がいました。野や山に分け入って竹を切り取っては、いろいろなことに使っていました。名前を、「さぬきのみやつこ」といいました。

ある日のこと、竹林の中に、根元の光っている竹が一本ありました。おじいさんが不思議^②に思っ近づいて見てみると、竹の中が光っています。中を見ると、手のひらほどの小さな人が、たいへんかわいらしい様子ですわっています。

〈教科書書きおろしによる〉

(1) 線①「おきな」とは、どういう意味ですか。

〈意味〉の文章中からぬき出しましょう。

(2) 竹取のおじいさんの名前は何か。

(3) 線②竹取のおじいさんが不思議に思ったのは、どんなことでしたか。〈意味〉の文章中の言葉を使って答えましょう。

(4) この文章の内容としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 竹取のおじいさんの願いがかない、竹林の中で子どもをさずかることができた。

イ 竹取のおじいさんは、竹の中にすわっている手のひらくらいの大きさの人を見つけた。

ウ 竹取のおじいさんは、手のひらくらいの大きさの人を、こっそり竹の中で育てていた。

エ この文章をふくむ物語がもとになってできたお話を次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 一寸法師

イ 浦島太郎

ウ かぐやひめ

エ

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

祇園精舎^{ぎおんしょうじゃ}のかねの声、

諸行無常^{しよぎょうむじょう}のひびきあり。

娑羅双樹^{しやらそうじゆ}の花の色、

盛者必衰^{じようしやひつすい}のことわりをあらはす。

おごれる人も久しからず、

ただ春の夜の夢^よのごとし。

たけき者もつひ^ひにはほろびぬ、

ひとへに風の前^へのちりに同じ。

〈「平家物語」より〉



5

〈意味〉

祇園精舎という寺のかねの音は、^② 全てのものはうつり変わっていくものだという真理を、ひびきの中にこめています。

娑羅双樹という花の色は、今は勢いのある人でも必ずおとろえるという真理を表しています。

おごり高ぶっている人でも、ずっとそのままいることはできません。ちょうど、短くてはかない春の夜の夢のようなものです。

勇ましく強い者も、最後にはほろんでしまいます。それは全く、風にふき飛ばされていくちりのようなものなのです。

〈教科書書きおろしによる〉

10

(1) 線①「盛者必衰のことわり」とはどういう

ことですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア 強い人の勢いはずっと変わらないということ。

イ 勢いがある人もいつかはおとろえるということ。

ウ 勢いのある人は今を大切にしているということ。

(2) 線②「全てのものはうつり変わっていくものだ」とありますが、このことをどんなものにとえて表していますか。〈意味〉の文章中から二つ、

五字と十三字でぬき出しましょう。

(3) この古文の特徴^{ちよう}としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 語りかけるような言葉で親しみやすさを表している。

イ ひらがなだけを使って分かりやすく説明している。

ウ 七音・五音を基本とした独特^{どくとく}のリズムがある。

(4) 「平家物語」の説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 実際^{じっさい}にあった戦いなどをもとにして書かれた物語である。

イ 作者が身近な出来事について思ったことを書いています。

ウ 昔から伝わる伝説をもとにした作り話である。

--

--

三 題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

春はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だ

ちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、ほと

るの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、

ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもを

かし。

〈清少納言「枕草子」より〉

〈意味〉

春はなんといっても明け方。だんだんとあたりが
白んで、山のすぐ上の空が少し明るくなって、紫
がかった雲が細くたなびいている様子。

夏は夜。月が出ていればもちろんよい。やみ夜で

も、ほたるがたくさん飛びかっている様子。また、

ほんの一つ二つ、ほのかに光って飛んでいくのも

よい。雨などがふるのも、またよい。

〈教科書書きおろしによる〉

- (1) 作者がよいと思っている、春の時間帯を答えましょう。

- (2) — 線①「白んで」とありますが、どうなるということですか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 空がどんどん白くなっているということ。
イ 夜が明けて、空が明るくなるということ。
ウ 月が出て、白い光を放っていること。

- (3) — 線②「たなびいている」様子を表しているものとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 空全体に厚くたちこめている。
イ 横に尾を引いたようにうかんでいる。
ウ 小さく細切れになって散っている。

- (4) — 線③「よい」という意味の言葉を古文の中からぬき出しましょう。

四題目

次の漢詩を読んで、あとの問いに答えましょう。

春しゅん 曉ぎょう 孟もう 浩然こうねん

春眠しゅんみん 曉あかつきを 覚えおぼず
 処処しよしよに 啼鳥①ていちようを 聞く
 夜来やらい 風雨ふううの 声こえ
 花はな 落おつる こと 知る 多少たしょう



5

〈意味〉

春の明け方

春のねむりのこちよきに、

夜が明けたのも気がつかなかった。^②

あちこちから、

鳥の鳴き声が聞こえてくる。

昨夜、^③風雨の音が聞こえていた。

花は、いったい、どれくらい

落ちたのであろうか。

〈意味〉は教科書書きおろしによる

5

(1) この漢詩は、どんな季節の、どんな時間帯のこ
とを表していますか。

(2) 線①「啼鳥」とは何のことですか。〈意味〉
の中からぬき出しましょう。

(3) 線②「夜が明けたのも気がつかなかった」
のはなぜですか。〈意味〉の中の言葉を使って答
えましょう。

(4) 線③「風雨の音」が聞こえたことで、作者
はどのようなことを氣にかけていますか。〈意味〉
の中の言葉を使って答えましょう。

(5) この漢詩の特徴^{ちよう}としてもっともふさわしいもの
を次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 春の明け方のこちよさを、周りから聞こえ
てくる音を通して表現している。

イ 春の明け方のこちよさを、目で見た花の色
のあざやかさで表現している。

ウ 春の明け方のこちよさを、はだに感じるあ
たたかさをもとに表現している。

第十講・確認テスト

次の二重傍線部が修飾している箇所を選びなさい。

1 あのアの青い車はぼくの父親のものだ。

2 校庭に赤いチューリップをみんなで植えた。

3 私の父はあの大きいビルを設計した。

4 友だちとけんかしたぼくはとぼとぼ家に帰った。

5 青い服の女性が私の姉だ。

第十一講・敬語

◆敬語の種類◆

① 尊敬語：話し相手や、話題になっている人に敬意を表すため、その人に関わることを高めて言う言い方。Ⅱ主語は目上の人

・「お——になる」「ご——になる」という形を使う。

例 お話しになる ご使用になる

・「れる」「られる」を使う。

例 行かれる 述べられる

・特別な言葉を使う。

例 おっしゃる ごらんになる
めしあがる いらっしゃる

② 謙譲語：話し相手や、話題になっている人に敬意を表すため、動きのおよぶ相手を高めたり、自分や身内に関わることをへりくだらせたりして言う言い方。Ⅱ主語は自分、または身内

・「お——する」「ご——する」という形を使う。

例 お答える ご用意する

・特別な言葉を使う。

例 参る うかがう 拝見する

申しあげる

〈特別な言葉〉

	尊敬語	謙譲語
行く	いらっしゃる	まいる・参上する
いう	おっしゃる	申す・申しあげる
食う	めしあがる	いただく
する	なさる	いたす
見る	ごらんになる	拝見する



③ 丁寧語…話し相手に敬意を表すため、丁寧に言う方。

・特別な言葉を使う。

例 ございます よろしい

・文末に「です」「ます」をつける。

例 本です。歩きます。

一 次の文の——線の敬語の種類をあとのア〜ウから選び、記号で答えましょう。

① 先生が手紙をごらんになる。

② わたしは図書館にいます。

③ 先生に母の話を申しあげる。

ア 尊敬語

イ 謙譲語

ウ 丁寧語

二 次の——線の言葉は、ア 尊敬語、イ 謙譲語、ウ 丁寧語、のどれに当たりますか。記号で答えましょう。

① 父も参加したいと申しております。

② あなたはごらんになりましたか。

☐
☐
☐
☐
☐

三

次の文の——線の敬語の種類をあとからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

③ ここにはたくさんのお客さんがいます。

④ おかけになってお待ちください。

⑤ お部屋のおそうじは、わたくしがいたしました。

① どこかまちがっていると思います。

② 明日は十時までにお願いします。

③ 手品をひとつお目にかけましょう。

ア 尊敬語
イ 謙譲語
ウ 丁寧語

四

次の文の——線の言葉を「お（ご）になる」という言い方を使って、尊敬語に直しなさい。

① 山に登る。

② 家に帰った。

③ よく利用した。

五

次の文の——線の言葉を「お（ご）する」という言い方を使って、謙譲語に直しなさい。

① 注文を聞く。

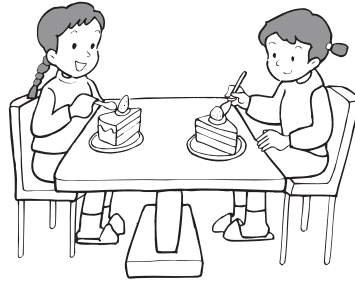
② かさを貸した。

③ 部屋をさがす。

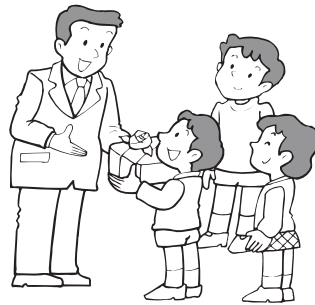
六 次の文の——線の言葉を、A・Bの場面に合った敬

語に直して書きましょう。

A



B



Aの場面

(1) 食べる

① お客様が、ケーキを

② わたしも、ケーキを

Bの場面

(2) わたす

・ わたしたちは、先生に記念品を

七 次の文の——線の言葉と同じ種類の敬語が使わ

れている文をあとのア〜ウから選び、記号で答え
ましょう。

① お帰りになるときは、わすれ物にご注意くだ
さい。

ア あなたのお父様がお話しになりました。

イ わたしがみなさんにお話ししましょう。

ウ ぼくにはとてもお話しできません。

② 先生がみなさんに話されると思います。

ア かぜをひいたので、妹は会場に来られない
と思います。

イ ぼくは時間どおりに会場に来られると思い
ます。

ます。

ウ 明日、先ぱいがたが会場に来られると思い
ます。

【八】 次の文の——線の言葉を丁寧語に書き直しま

しょう。

① 発表するときは、大きな声ではつきり言う。

② これは、初めて聞いた話だ。

③ すばらしいえんそうに、心から感動した。

【九】 次のア～ウの文から、敬語が正しく使われている

るものを一つ選び、記号で答えましょう。

ア おじさんがぼくにおたずねする。

イ 妹が、ぼくにおたずねになる。

ウ 近いうちにぼくの方からおたずねします。

第十一講・確認テスト

次の中から尊敬語^{そんけいご}を選びなさい。

1 ア お話^わしする イ お読^よみになる
ウ いた^いたく エ ま^まいる

2 ア ごら^んになる イ 拝^{はい}見^{けん}する
ウ 見^みます エ 見^みる

3 ア お読^よみする イ おう^うかがいする
ウ さしあ^あげる エ 来^きられる

4 ア さしあ^あげる イ お持^もちする
ウ おっし^しやる エ 申^{まう}す

5 ア お伝^{でん}えする イ お話^わしになる
ウ お聞^ききする エ お守^{まも}りする

第十二講・注文の多い料理店① (物語文)



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えま

しょう。

二人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を二ひき連れて、だいぶ山おくの、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

「ぜんたい、^①ここらの山はけしからんね。鳥もけものも一ひきもいやがらん。何でもかまわないから、早く^②タンタアー

ンと、やってみたいもんだなあ。」

「しかの黄色な横つばらなんぞに、二、三発お見まい申したら、ずいぶ



10

5

ん痛快^{つうかい}だろうねえ。^③くるくる回って、それから

どたつとたおれるだろうねえ。」

それは^④だいぶの山おくでした。案内してきた^{せん}専門の鉄ぼううちも、ちよつとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい山おくでした。

それに、あんまり山がものすごいので、その白くまのような犬が、二ひきいっしょに目まいを起こして、しばらくうなつて、それからあわをはいて死んでしまいました。

「^⑤実にぼくは、二千四百円の損害だ。」

と、一人のしんしが、その犬のまぶたを、ちよつと返して見て言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、も一人が、くやしそうに、頭を曲げて言いました。

〈宮沢賢治「注文の多い料理店」より〉

25

20

15

(1) 線① 「ここの山はけしからんね」とありますが、なぜそう思ったのですか。

(2) 線② 「タンタアーン」とは、何の音を表した言葉ですか。

(3) 線③ 「くるくる回って、……たおれるだろうねえ」の会話は、どんな感じで話しているように読み取れますか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

- ア 動物の動きのはげしさにあきれている。
 イ 動物を鉄ぼうでたおすことを楽しみにしている。
 ウ 動物をうつことの重大さを思っできん張している。

(4) 線④ 「だいぶの」を別の表現でくり返している部分を文章中からぬき出し、初めと終わりの五字を答えましょう。

(5) 線⑤ 「実にぼくは、二千四百円の損害だ」から分かることとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 犬の命よりも、お金のほうを大切に思っていること。

イ もうけようと思って犬にお金を使っていること。

ウ 金持ちであることをじまんしていること。

ア リょうし。 イ 遊びでかりに来ている。
 ウ 動物の命をそまつにあつかって平気である。
 エ 鉄ぼうのうち方がうまい。

二題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えま

しょう。

そしてガラスの開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

【どなたもお入りください。決してこ^①

えんりよはありません。】

二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

5

「こいつはどうだ。やっぱり世の中はうまくできてるねえ。今日一日なんぎしたけれど、今度はこないいいこともある。このうちは料理店だけれども、ただでこちそうするんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してこえんりよはありません

10

んというのはその意味だ。」

二人は戸をおして、中へ入りました。そこはすぐろう下になっていました。そのガラス戸のうら側には、金文字でこうなっていました。

【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大か

15

んげいいします。】

二人は大かんげいというので、もう大喜びです。

「君、ぼくらは大かんげいに当たっているのだ。」

「^②ぼくらは両方かねてるから。」

ろう下を進んでいきますと、今度は水色のペンキぬりの戸がありました。

20

「どうも変なうちだ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「^③これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

25

そして二人はその戸を開けようとしめすと、上に黄色な字でこう書いてありました。

【^④当軒は注文の多い料理店ですから、どうか

そこはご承知ください。】

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

30

〈宮沢賢治「注文の多い料理店」より〉

(1) 線① 「決してごえんりよはありません」と

いう言葉を、二人のしんしはどのように理解したのですか。文章中から九字でぬき出しましょう。

(2) 線② 「ぼくらは両方かねてるから」とは、

何と何をかねているという意味ですか。

(3) 線③ 「注文の多い料理店」という意味を、

から選び、記号で答えましょう。

ア ざんざん イ しんしん
ウ ずんずん エ ばらばら

--

(4) 線③の言葉には、このしんしのどんな性格

が表れていますか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア 料理店の主人をかばおうとするやさしい性格。

イ 外国にあこがれる夢見がちな性格。

ウ 知ったかぶりをするみえっぱりな性格。

エ 他人の意見に反対するひねくれた性格。

--

(5) 線④ 「注文の多い料理店」という意味を、

二人のしんしはどのように理解したのですか。文章中から九字でぬき出しましょう。

第十二講・確認テスト

次の中から謙譲語を選びなさい。

- | | | |
|----------|-----------|----------|
| 1 | ア ごらんになる | イ 話される |
| ウ お食べになる | エ お聞きする | |
| 2 | ア お教える | イ お持ちになる |
| ウ おいでになる | エ お話しになる | |
| 3 | ア めしあがる | イ おっしゃる |
| ウ 拝見する | エ お休みになる | |
| 4 | ア ご質問なさる | イ ご案内する |
| ウ めしあがる | エ ございます | |
| 5 | ア お出かけになる | イ 持たれる |
| ウ ごらんになる | エ さしあげる | |

第十三講・注文の多い料理店②

(物語文)



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

しょう。

①【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。

い。

「どうだ、取るか。」

「しかたない、取ろう。確かによつぽどえらい人なんだ。おくに來ているのは。」

5

二人はぼうしとオーバコートをくぎにかけ、くつをぬいでペタペタ歩いて戸の中に入りました。

戸のうら側には、

②【ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、

その他金物類、ことにとがったものは、みんなここに置いてください。】

10

と書いてありました。戸のすぐ横には、黒ぬりのりっぱな金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。

かぎまでそえてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気を使うとみえるね。金気のないものはあぶない。ことにとがったものはあぶないと、こういうんだらう。」

15

「そうだらう。してみると、かんじようは歸りにここではらうのだらうか。」

「どうもそうらしい。」

20

「そうだ。きつと。」

二人は眼鏡を外したり、カフスボタンを取ったり、みんな金庫の中に入れて、パチンとじょうをかけた。少し行きますとまた戸があつて、その前にガラスのつぼが一つありました。戸にはこう書いてありました。

25

【つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。】

ぬってください。】

見ると確かにつぼの中のものは牛乳ぎゅうにゅうのクリームで
した。 30

A 「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

B 「これはね、外が非常に寒いだろう。部屋の中が
あんまりあたたかいとひびが切れるから、その
予防なんだ。どうもおくには、よほどえらい人
が来ている。こんなところで、案外きぼくらは、貴
族ぞくと近づきになるかもしれないよ。」 35

二人はつぼのクリームを顔にぬって手にぬって、
それからくつ下をぬいで足にぬりました。それでも
まだ残っていましたから、それは二人ともめいめい
こっそり顔へぬるふりをしながら食べました。 40

それから大急ぎで戸を開けますと、そのうら側に
は、

【クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬ
りましたか。】 45

と書いてあって、小さなクリームのつぼがここにも
置いてありました。

C 「そうそう、ぼくは耳にはぬらなかった。あぶな

く耳にひびを切らすとこだった。ここの主人は
実に用意周到だね。」 50

D 「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところ
で、ぼくは早く何か食べたいんだが、どうも、
こう、どこまでもろう下じゃしかたないね。」
すると、すぐその前に次の戸がありました。

【料理はもうすぐできます。十五分とお待たせ
はいたしません。すぐ食べられます。早くあ
なたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけ
てください。】 55

そして戸の前には、金ぴかのこう水のびんが置い
てありました。

二人はそのこう水を、頭へパチャパチャふりかけ
ました。

ところが、そのこう水は、どうもすのようなお
いがするのです。

E 「このこう水は変にすくさい。どうしたんだろ
う。」 65

F 「まちがえたんだ。下女がかぜでもひいてまちが

えて入れたんだ。」

二人は戸を開けて中に入りました。

戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。
た。

【いろいろ注文^③が多くてうるさかったでしょ

う。お気の毒でした。もうこれだけです。ど

うか、体中に、つぼの中の塩をたくさんよく

もみこんでください。】

なるほどりっぱな青い瀬戸^{せと}の塩つぼは置いてあり

ましたが、今度という今度は、二人ともぎょつとし

て、おたがい^④にクリームをたくさんぬった顔を見

合わせました。

〈みやざわけんじ
宮沢賢治「注文の多い料理店」より〉

75

70

(1) — 線①・②の注文を読んで、二人はなぜそう

しなければならぬと考えましたか。それぞれあ
とのア〜エから、ふさわしくないものを選び、記
号で答えましょう。ただし、一つとは限りません。

① 【どうかぼうしと外とうとくつをおとりくだ

さい。】

ア 食事をするのに、ぼうしと外とうとくつは
必要ないから。

イ 料理店の主人が、ぼうしも外とうもくつも
きらいだから。

ウ えらい人が来ているのに、ぼうしや外とう
やくつを身につけているのは失礼だから。

エ ぼうしと外とうとくつをとると、料理がお
いしく感じられるから。



② 【ネクタイピン、……みんなここに置いてください。】

ア 食事をするのに、金物類は必要ないから。
イ 料理に電気を使うので、金物類はあぶないから。

ウ 帰りにここでお金をはらうので、さいふも置いていけばよいから。

エ えらい人が来ているので、とがったものを持っているとあやしまれるから。

オ 。

カ 。

キ 。

(2)

AとFの言葉からは、二人のどんな気持ちが分かりますか。次の中からもっともふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えましょう。ただし、同じ記号を二度以上使ってもかまいません。

ア あれ？ 何かおかしい。

イ 細やかな心配りがありがたい。

ウ いったいいつ料理が食べられるのだろう。

(3)

線③「注文」は、だれがだれにしているのですか。Aは自分で考え、Bは本文からぬき出して答えましょう。

B	A
<input type="text"/>	<input type="text"/>
に	が

注文している。

エ 何もおかしくはない。えらい人に会えるかもしれないぞ。

オ きつと何かのまちがいだ。気にすることはない。

カ 気味が悪いからもう帰りたい。

キ 何だか楽しそうなことだなあ。

D	A
<input type="text"/>	<input type="text"/>
E	B
<input type="text"/>	<input type="text"/>
F	C
<input type="text"/>	<input type="text"/>

(4)

——線④「おたがいにクリームをたくさんぬった顔を見合わせました」とありますが、なぜですか。次の□
④あう⑤うにあてはまる言葉をあとのア～エからそれぞれ選び、記号で答えましょう。

戸に書かれた文を読んで、今度という今度は二人とも□
④あとした。今まで、料理を□
⑤うため
にいろいろ準備させられていると思っていたけれど、もしかすると自分たちが□
⑤うためだったのかもしれないと、やっと気づいたからだ。

ア ほっ

イ ギよっ

ウ 食べられる

エ 食べる

④あ

⑤う

⑥い

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいと思う。」

「たくさん注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考える

ところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやるうちと、こういうことなんだ。これは、その、

つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」

がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」

がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「にげ……。」

がたがたしながら、一人のしんしは後ろの戸をお

15

10

5

そうとしました

が、どうです、

戸はもう一分も

動きませんでした。

た。

おくの方には

まだ一枚戸が

あつて、大きなかぎあなが二つ付き、銀色のホーク

とナイフの形が切り出してあつて、

【いや、わざわざご苦労です。たいへんけっこ

うにできました。さあさあ、おなかにお入

りください。】

と書いてありました。おまけに、かぎあなからは、

二つの青い目玉がこちちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

二人は泣きだしました。

すると、戸の中では、こそこそこんなことを言っ

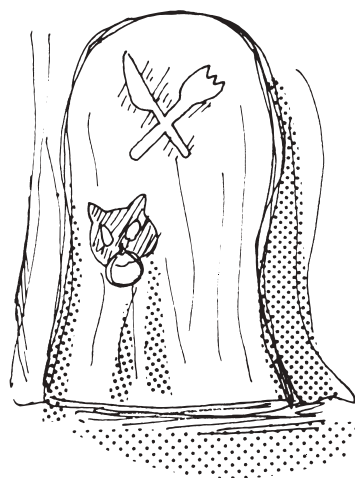
ています。

35

30

25

20



「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまな
いようだよ。」^④

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。
あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったで
しょう、お気の毒でしたなんて、まぬけたこと
を書いたもんだ。」^⑤

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、ほねも
分けてくれやしないんだ。」^⑥

「それはそうだ。けれども、もしここへあいつらが
入ってこなかったら、それはぼくらの責任だぜ。」^⑦

「よぼうか、よぼう。おい、お客さんがた、早くい
らっしゃい。いらっしゃい。いらっしゃい。お皿
もあらってありますし、菜っ葉ももうよく塩でも
んでおきました。あとは、あなたがたと、菜っ葉
をうまく取り合わせて、真っ白なお皿にのせるだ
けです。早くいらっしゃい。」^⑧

「へい、いらっしゃい、いらっしゃい。それともサ
ラドはおきらいですか。そんならこれから火をお
こしてフライにしてあげましょうか。とにかく早

50

45

40

くいらっしゃい。」

二人はあんまり心をいためたために、顔がまるで
くしゃくしゃの紙くずのようになり、おたがいにそ
の顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きま
した。^⑨

中では、フツフツと笑って、またさけんでいます。
「いらっしゃい、いらっしゃい。そんなに泣いては、
せつかくのクリームが流れるじゃありませんか。」^⑩

「へい、ただいま。じき持ってまいります。さあ、
早くいらっしゃい。」^⑪

〈みやざわけんじ
宮沢賢治「注文の多い料理店」より〉



60

55

(1) — 線① 「これは、その、……ぼくらが……」

と言葉がつまっているのはなぜですか。次の中から
最もふさわしいものを選び、記号で答えま
しょう。

ア 自分たちが大変な立場にあることに気づき、
とてもおそろしくなったから。

イ いったいどんなものを食べさせられるか分か
らないと、とても不安になったから。

ウ 相手が近づいてくるのが分かり、だんだんと
いかりがこみ上げてきたから。

☐

(2) — 線② 「おなか」には二つの意味がふくまれ

ています。それぞれ「なか」の意味がよく分かる
ように答えましょう。

(3) ☐ にもっともよくあてはまる言葉を次の中

から選び、記号で答えましょう。

ア うろうろ イ きよろきよろ
ウ ひよろひよろ エ ちよろちよろ

☐

(4) — 線③ 「がたがたがた」の表現について

述べたものとしてもっともふさわしいものを次の
中から選び、記号で答えましょう。

ア ふるえるときの音が大きいことを表してい
る。

イ 泣きながらふるえている様子がよく分かる。
ウ とてもはげしくふるえている様子がよく分か
る。

☐

(5) — 線④ 「もう気がついたよ」とありますが、

どんなことに気がついたと言っているのですか。
次の中からもっともふさわしいものを選び、記号
で答えましょう。

ア そろそろ料理を食べさせてもらえるということ。
と。

イ すぐ近くに「親分」がいるということ。

ウ 自分たちが食べられてしまうということ。

(6) — 線⑤ 「親分」、⑦ 「ぼくら」とありますが、

「ぼくら」は、「親分」に対し、何に当たるのです
か。漢字二字で答えましょう。

(7) — 線⑥ 「まぬけたこと」とありますが、「ぼ

くら」もまぬけたことを言っているところがあり
ます。その文を二つぬき出しましょう。

(8) 二人のしんしの絶望^{ぜつぼう}的な様子を、たとえを使っ
て表現しているところがあります。その部分をぬ
き出しましょう。

(9) — 線⑧・⑨は、それぞれだれに対して言った
言葉ですか。

言葉ですか。

⑧

⑨

第十三講・確認テスト

次の中から類義語を選びなさい。

1 興味

ア 寒心

イ 関心

ウ 感心

エ 希望

2 準備

ア 用意

イ 心配

ウ 備品

エ 標準

3 向上

ア 上部

イ 進行

ウ 進歩

エ 上段じょうだん

4 不安

ア 安心

イ 心配

ウ 安全

エ 不信

5 期待

ア 期日

イ 活気

ウ 大切

エ 希望

第十四講・ことばの教養



一 題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

* いっぱいやりながら、列車時刻表を熟読するとい
う風流人の随筆を読んだこともある。つい読みふ
けて時のたつのを忘れる、という。人間、さまざま
な趣味がある。

そういう話に比べると、辞書を読むのは、はるか
に正統的で、むしろ常識的すぎて気がひけるくらい
だ。そもそも字引きなどと言って、引くものと決め
てしまっているのがおかしい。

辞書を道具と考え、必要なときにだけちよつと使
い、あとは放ったらかしにして置くのは心なき人
のことである。そういう辞書が本場に役立つと考え
るのはすこし虫がよすぎる。人間だって頼みごとの
あるときだけやってくるような手合を友だちとは

10

言うまい。ふだん用はないが、どうしているか、と
たずねてくれるようであってこそ、付き合いがある
と言える。

15

辞書は引くものと割り切っている実用派はしらな
い語ばかりを相手にする。それでは親しみもわか
ない道理だ。どんな辞書にも日常よく使われること
が入っていて、こまかい説明がついているけれども、
実用派はそんなところを見ることがない。せつかく
の宝が眠ったままである。もったいない。

20

辞書のおもしろさは、わかり切っていると思つて
いることばの項をていねいに読むことにある。そこ
をのみこまないと辞書とは仲良しになれない。

25

〈外山 滋比古「ことばの教養」より〉

* いっぱいやる＝お酒を飲むこと。

* 手合＝連中。

(1)

——線①「おかしい」とありますが、どのようなところが「おかしい」のですか。それを説明した次の文の□□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

のことを

と呼んで、

引くものと決めてしまっているところ。

(2)

——線②「心なき人」とは、ここではどのような人ですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辞書を読むような常識的な人。

イ お酒をのみながら、時刻表を読む人。

ウ 辞書が必要なときにしか引かない人。

エ 辞書を放ったらかしてまったく使わない人。

--

(3)

この文章で筆者が最も述べたかったことは、何ですか。文章中から二文でぬき出し、初めと終わりの四字を答えなさい。(、や。も一字と数えま

初め

終わり

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

* いっぱいやりながら、列車時刻表を熟読するとい
う風流人の随筆を読んだこともある。つい読みふ
けて時のたつのを忘れる、という。人間、さまざ
まな趣味がある。

そういう話に比べると、辞書を読むのは、はるか
に正統的で、むしろ常識的すぎて気がひけるくらい
だ。そもそも字引きなどと言って、引くものと決め
てしまっているのがおかしい。

辞書を道具と考え、必要なときにだけちよつと使
い、あとは放ったらかしにして置くのは心なき人の
ことである。そういう辞書が本当に役立つと考える
のはすこし虫がよすぎる。人間だって頼みごとの
あるときだけやってくるような手合を友だちとは
言うまい。ふだん用はないが、どうしているか、と
たずねてくれるようであってこそ、付き合いがある
と言える。

辞書は引くものと割り切っている実用派はしらな

い語ばかりを相手にする。それでは親しみもわか
ない道理だ。どんな辞書にも日常よく使われること
が入っていて、こまかい説明がついているけれども、
実用派はそんなところを見ることがない。せつかく
の宝が眠ったままである。もったいない。

辞書のおもしろさは、わかり切っていると思つて
いることばの項をていねいに読むことにある。そこ
をのみこまないと辞書とは仲良しになれない。

〈外山 滋比古「ことばの教養」より〉

* いっぱいやる＝お酒を飲むこと。

* 手合＝連中。

(1) 線①「頼みごとのあるときだけやってくる」

とありますが、これは辞書のどのような使い方を
たとえたものですか。それを説明した次の文の
□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

辞書を

と考えて、必要なときだけ

使い、それ以外は

にして置くような使い方。

(2) 線②「宝」とありますが、これを説明した

次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき
出さない。

辞書の中の、こまかい

がついている

ことばの

こと。

(3) この文章で述べられている内容としてふさわし
いものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辞書を読むより、列車時刻表を読むほうが常
識的だ。

イ 辞書を放ったらかしておくのは心ない人のす
ることだ。

ウ 辞書のおもしろさは、知らない語をよく読む
ことだ。

エ 実用派は、辞書でよく使われることばかり
引く。

第十四講・確認テスト

次の中から対義語を選びなさい。

1 絶対

ア 反対
ウ 部分
エ 対応

2 減少

ア 加點
ウ 増加
エ 過分

3 理想

ア 現実
ウ 状態
エ 事件

4 解散

ア 群衆
ウ 集合
エ 集団

5 安心

ア 心勞
ウ 放心
エ 心配

第十五講・熟語の構成、同音異義語、同訓異字



熟語の構成

◆熟語とは◆

熟語とは、二字以上の漢字を組み合わせてできた言葉のこと。多くの熟語は漢字二字で書き表される。

◆二字熟語の構成◆

①にた意味を表す漢字を組み合わせたもの

例 集合 道路 停止 出発

②意味が対になる漢字を組み合わせたもの

例 上下 明暗 進退 親子

③上の漢字が下の漢字の意味をくわしく説明しているもの

例 新人↓新しい人 早朝↓早い朝
再会↓再び会う 代打↓代わりに打つ

④上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表すもの

例 作文↓作る文を 読書↓読む書を
着陸↓着く陸に 乗車↓乗る車に

⑤上の漢字が下の漢字の意味を打ち消しているもの

例 不正 無休 未完 非礼

熟語の意味が分からなくても、漢字一字一字の意味と熟語の構成を考えれば、大体の意味を推測（すいそく）できることがある。

一

次の①～④の構成の熟語をあとのア～クから二つずつ選び、記号で答えましょう。

① 上の漢字が下の漢字の意味をくわしく説明しているもの。

② 上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表すもの。

③ 意味が対になる漢字を組み合わせたもの。

④ いた意味を表す漢字を組み合わせたもの。

ア 戦争 イ 勝負 ウ 消火 エ 天地
オ 美人 カ 加熱 キ 学習 ク 黒板

③	①
<input type="text"/>	<input type="text"/>
・	・
<input type="text"/>	<input type="text"/>
④	②
<input type="text"/>	<input type="text"/>
・	・
<input type="text"/>	<input type="text"/>

二

次の①～⑤の熟語と同じ構成の熟語をあとのア～ケから二つずつ選び、記号で答えましょう。

① 登山 ② 外国 ③ 表現 ④ 高低
⑤ 未定

ア 青空 イ 岩石 ウ 乗船 エ 無理
オ 増減 カ 行進 キ 昼夜 ク 着席
ケ 良心 コ 不安

⑤	③	①
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
・	・	・
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	④	②
	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	・	・
	<input type="text"/>	<input type="text"/>



A・Bの中から漢字を一字ずつ選び、次の構成になる漢字二字の熟語を三つずつ作りましょう。ただし、同じ漢字は二度使えません。

① にた意味を表す漢字を組み合わせた熟語。

.
.

② 意味が対になる漢字を組み合わせた熟語。

.
.

③ 上の漢字が下の漢字の意味をくわしく説明している熟語。

.
.

④ 上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表す熟語。

.
.

B

妻 新
火 富
敗 類
山 画
洋 退
石 短
群 測

A

勝 登
墓 夫
絵 用
場 旧
大 計
西 乗
消 豊

同音異義語

漢字には、同じ読み方をするものがたくさんあるが、そのうち、音読みがまったく同じで、意味がちがう熟語のことを、同音異義語という。

例 カイホウ

人質^{ひとじち}を
する。

校庭を
する。

病気が
に向かう。

会員に
が配られる。

例 コウエン

のベンチにすわっている。

公民館で芝居^{しばい}の
が行われた。

ノーベル賞科学者の
を聞く。

同訓異字

同じ読み方をする漢字のうち、訓読みが、まったく同じで、意味がちがう字のことを同訓異字という。

例 とる

虫を
る。
手を
る。

例 きく

音を
く。
薬が
く。

例 とまる

まる車が目に
まる。

※同訓異字を使って一つの文章にすると、覚えやすくなる。

四

次の——線のカタカナを漢字に直したものとして正しいほうを選び、記号に○をつけなさい。

① 街でアンケートにカイトウする。

イ ア
解 回
答 答

② ゲンシ時代の化石が見つかった。

イ ア
原 原
子 始

③ いろんなことにカンシンを持つとう。

イ ア
感 関
心 心

④ キョウリヨクな手助けが必要だ。

イ ア
強 協
力 力

⑤ 会社で健康ホケンに加入する。

イ ア
保 保
険 健

五

次の——線のカタカナを漢字に直したものとして正しいほうを選び、記号に○をつけなさい。

① 待ち合わせをして友達とアウ。

イ ア
会 合
う う

② 説明するのに易しい例をアゲル。

イ ア
上 挙
げ る

③ あの男がすがたをアラワス時間だ。

イ ア
表 現
す す

④ わからなかった問いの答えをウツス。

イ ア
写 移
す す

⑤ 生徒の安全管理に日々ツトメル。

イ ア
務 努
め る

六

次の——線のカタカナを漢字に直したものと
して正しいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (1)
- ① カイジヨウの近くでチケットを買う。
 - ② イベントのカイジヨウは午前十時だ。
 - ③ よく晴れてカイジヨウはおだやかだ。

ア 海上 イ 階上 ウ 会場 エ 開場

①

②

③

- (2)
- ① この鳥はセイチヨウすると美しい声で鳴く。
 - ② セイチヨウのオスの羽の色は大変美しい。

ア 成長 イ 生長 ウ 声調 エ 成鳥

①

②

- (3)
- ① 毎朝新聞を読むのがシュウカンになる。
 - ② この機関紙はシュウカンで発行される。

ア 習慣 イ 週間 ウ 週刊 エ 終刊

①

②

七

次の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- (1)
- ① 新学期から学級イインに選ばれた。
 - ② 駅前に新しく歯科イインが開業する。

①

②

- (2)
- ① 自分にジシンを持つことが大切だ。
 - ② 自分ジシンが一番よくわかっている。

①

②

- (3)
- ① 小学生をタイシヨウとしたイベント。
 - ② 二人はタイシヨウ的な性格だ。

①

②

【八】 次の――線のカタカナを、それぞれ漢字一字で

書きなさい。

(1) 学校に毎日わすれモノ^①をして来るモノ^②がある。

①

②

(2) 夏のアツ^①い日に、アツ^②着^ぎをしてアツ^③いお茶を飲む。

①

②

③

(3) ハヤ^①く走^④ったら、ハヤ^②く目的地にツ^③くこ
とに気がツ^④いた。

①

②

③

④

第十五講・確認テスト

次のカタカナを漢字に直したものとして、正しいものを選びなさい。

1 その時感じたシンジョウを言葉にするのは難し
い。

ア 信条 イ 身上
ウ 身上 エ 心情

2 このキカン、この道は通行止めだ。

ア 期間 イ 機関
ウ 基幹 エ 器官

3 責任をツイキユウする。

ア 追求 イ 追及
ウ 追究 エ 追給

4 平和維持活動にカンシンを持つ。

ア 関心 イ 感心
ウ 寒心 エ 歓心

5 新聞キシヤになりたい。

ア 汽車 イ 貴社
ウ 帰社 エ 記者

第十六講・ベートーベン（伝記）



一 題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

「ルードウィヒは作曲がうまくいかず、父に相談した。」

「いいか。あしたから、一步も外に出るんじゃない。朝からずっとピアノの前にこしかけて、指から血が出るまで、ひきつづけるんだ。」

ヨハンはいった。

父はすぐれた歌手だけれど、作曲のことに關しては父の①いっていることはちがうんじゃないかと、ルードウィヒは思った。

でも、すっかり自信をなくしてしまっていたルードウィヒは、どうにでもなれと思った。それで、つぎの日は、朝からピアノの前にこしかけて、自分の曲だけをひきつづけた。

10

5

②

ひきつづけているうちに、なんだかだんだんたいくつになってきた。おなじ曲をひくからたいくつというのではなくて、やっぱりこの曲自身が変化がなくなくてつまらないのではないかと、ルードウィヒは思った。

速度記号も発想記号も、わざと無視^{むし}してひいてみた。^{*}和音も、わざとずらしてみた。

「……おもしろいよ。こっちのほうが。」

ルードウィヒは新しい五線紙をもってきて、さっそく、いまひいてみた曲を書きうつした。

何回もそうやってひき変え、書きなおしては、ネーフェ先生のところへもっていく。またしかられ、またなおす。いく日もいく日もそうやったあと、どうとうある日、ネーフェ先生がいった。

「ルードウィヒ、おめでとう。これならりっぱだよ。すてきな曲ができたね。」

25

20

15

そのときルードウィヒ^③バン^③ベートーベン、十二さい。そのはじめての曲が、『ドレスラーの行進曲の主題による九つの変奏曲ハ短調』である。

〈畑山^{はたやま}博^{ひろし}「ベートーベン」より〉

*和音^④二つ以上の高さのちがう音が同時にひびいたときの音。

30

(1) — 線①「父のいつていること」とは、どのよ

うなことですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 苦しい思いを曲にするのが一番いいということ。
イ 作曲中はずっとピアノをひいているべきだということ。

ウ 作曲中は父以外の人間と会ってはいけないということ。

エ 作曲中は眠らずに、五線紙に曲を書きうつすべきだということ。

(2) — 線②「ひきつづけているうちに、なんだか

だんだんたいくつになってきた」とありますが、なゼルードウィヒはたいくつになってきたのですか。文中の言葉を使って答えなさい。

(3)

——線③「はじめての曲」とありますが、ルー

ドウィヒがはじめて作曲した曲についての説明としてふさわしくないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ネーフェ先生の指導を受けて曲を完成させた。

イ 作曲をするときには、それまでに作曲した曲の速度記号や発想記号を無視したり、和音をずらしたりしてみた。

ウ ルードウィヒが十二さいのときに完成した。

エ 作曲を始めてからほとんどすぐにできあがった。



二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

この時期、ベートーベン^②は、もう一つの大きなピ
ンチにみまわれている。なぜだか理由はわからない
のだけれど、ピアノや弦楽器^{げんがつき}の低い音を聞くと、
それが、ま^①えのようにいい*ハーモニー^③になって
聞こえないのだ。

5

*和音が、高いほうだけ耳に入って、低いほうがよ
く聞こえない。これは作曲家にとって、重大なこと
だった。

はじめ第一交響曲^{こうきやうきよく}の作曲をしていて、そのことに
気がついた。

10

ベートーベンの作曲のやり方というのは、頭にう
かんだ*主題^{しゅだい}をつぎつぎに頭のなかで発展^{はつてん}させて
いつき^②に書くというのとはちがっていた。

散歩のとちゅうや家にいるとき、とつぜん天のど
こからかたびこんでくるようにして頭をしめつける

15

*楽想がある。するとそれを、ベートーベンは、とつ

さに五線紙に書いておく。

そういうものが、前後の関係なしにたくさんあつ
て、それを、あとで構成^{こうせい}するのだ。

スケッチした譜面^{ふめん}を、すぐにピアノでひいてみる
ことがある。

20

そうすると、たったいま頭のなかで聞こえていた
音と、じつさいの音がちがうのだ。

「そんなばかな……。」

〈畑山^{はたやま} 博^{ひろ}「ベートーベン」より〉

*ハーモニー＝音のひびきあい。調和。


*和音＝二つ以上の高さのちがう音が同時にひびいたと
きの音。

*主題＝中心となる楽想やメロディ。

*楽想＝楽曲の構想。頭のなかにながく楽曲のイメージ。

(1)

——線①「まえのようにいいハーモニーになつて聞こえない」について、次の問いに答えなさい。

⑥ 線①のことにベーターベンが気づいたのは、いつですか。「……をしていたとき。」に続くように、にあてはまる言葉を文中からぬき出なさい。

[illegible]

をし

ていたとき。

①——線①と同様のことが書かれている一文を文中からさがし、初めの五字を答えなさい。

(2)

(2) ———線②「ベートーベンの作曲のやり方」とはどんなやり方ですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭にとびこんできた楽想をすぐに五線紙に書き
とめておき、あとで集まったものを構成するやり方。
イ 思いついた楽想をとっさに五線紙に書きと
め、思いついた順にならべていくやり方。

イ 思いついた楽想をとっさに五線紙に書きとめ、思いついた順にならべていくやり方。

ウ 思いついた主題をつぎつぎに頭のなかでひろげていき、集中していつきに書くやり方。

工 最初に曲の構成を考えておいて、それに合う
主題をいつきに考えていくやり方。

(3)

——線③「じっさいの音」とは、何の音ですか。

第十六講・確認テスト

次のカタカナを漢字に直したものとして、正しいものを選びなさい。

1 道でばったり友人にあった。

ア 在 イ 合

ウ 会 エ 有

2 夏休みのカダイが終わらない。

ア 過大 イ 課題

ウ 仮題 エ 花台

3 薬がキく。

ア 聞 イ 聴

ウ 効 エ 利

4 まどをアける。

ア 空 イ 開

ウ 明 エ 飽

5 席にツく。

ア 付 イ 突

ウ 着 エ 就

第十七講・短歌①（百人一首）

短歌

短歌とは、日本の定型詩である和歌の形式の一つ。
和歌には長歌、片歌^{へんか}、旋頭歌^{せどうか}など色々な種類があったが、短歌だけがうたいつづけられたため、今では和歌といえば短歌を指すようになった。

◆短歌の形式◆

「五・七・五・七・七」の三十一音からなっている。
初めの「五・七・五」を上^うの句、後の「七・七」を下^{した}の句という。

（上の句） （下の句）
五 七 五 七 七
金色^{こんじき}の小さき鳥の形して いちようちるなり夕日^{ゆふひ}の丘^{おか}に
初句 二句 三句 四句 結句

◆表現技法◆

- ・字余り^{あま} 音数が三十一音より多いこと。
- ・字足らず 音数が三十一音より少ないこと。
- ・倒置法^{とうちほう} 言葉の順序を逆^{さか}にすること。
- ・比喩^{ひよ} ほかのものにたとえて意味をわかりやすくすること。
- ・体言止め 名詞（ものの名前）で語句をとめること。
- ・擬人法 人でないものを人にたとえること。



一 次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A

石^{いわばし}走る^{たるみ}垂水の上のさわらびの

|| 和歌(万葉集)||

もえ出^いづる^ず になり^{なり}にけるかも

志貴皇子^{しきのみこ}

岩の上を水^{みづ}が激^{はげ}しく流れ落ちる滝^{たき}のほとりに、わらびが芽^めを出す がやってきたのだなあ。

B

東^{ひんがし}の野にかぎろひ^いの立つ見えて

かへり見^えすれば月^{つき}かたぶきぬ

柿本人麻呂^{かきのものひとまろ}

東の方の野には夜明けの光がさし始めるのが見え、西の方をふり返ると月^{つき}がかたむき、しずもうとしている。

C 金色の小さき鳥の形して

|| 近代短歌 ||

いちようちるなり夕日の丘に

与謝野晶子^{よさのあきこ}

D 街をゆき子ども^このそばを通るとき

みかんの香^かせり冬^{ふゆ}がまた来る

木下利玄^{きのしたりげん}

(1) Aの歌の にあてはまる季節を答えなさい。

(2) Bの歌の「かぎろひ」とは何ですか。()
の中から最もふさわしい言葉をぬき出さない。

(3) Cの歌について、次の問いに答えなさい。

① この歌によまれている季節はいつですか。

② この歌の鑑賞文^{かんしょうぶん}として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア まぶしいほどの銀杏のまいがりズミカル

にえがかれている。

イ たくさんの鳥たちのにぎやかなまいが、かえって夕暮^ぐれのさびしさを感じさせる。

ウ 夕日に照り映^はえてまい落ちる銀杏の葉の形と色を鳥にたとえて、秋の夕方のはなやかな美しさをえがいている。

エ 夕日の岡からながめた遠くの風景が美しい。

(4) Dの歌の「みかんの香せり」というのは、今の話し言葉では使われない言い方(文語)です。その意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みかんを売っていた

イ みかんのかおりがした

ウ みかんのかおりがしなかった

エ みかんを手わたした

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

短歌は、五・七・五・七・七の三十一音で作られます。千三百年以上も昔から作られ、今も多くの人々に親しまれています。自然の風景や気持ち、それぞれの時代の言葉でうたいあげられてきました。

まず現代の歌人の作品を読みましょう。

5

A 四万十に^①光の粒^{つぶ}をまきながら

川面^{かわも}をなでる風の手のひら

俵^{たわら} 万智^{まち}

四万十川の水面に日ざしがふり注ぎ、^② おだやか

な川風が日ざしとたわむれるように川面にさざ波を立てています。「光の粒」「なでる」「手のひら」という言葉が、やわらかな音のひびきとリズムを作り出しています。

10

昔の人は、どのような情景^{じやうけい}をよんだのでしょうか。奈良時代^{なら}の終わり（千二百年ほど前）には、『万葉集』という歌集が作られました。その中の一つに、次のような歌があります。

B 石走^{いはばし}る垂水^{たるみ}の上のさわらびの

萌^もえ出^いづる春^{はる}になりにけるかも

志貴皇子^{しきみこ}

20

わらびの新芽が、溪流^{けい}のほとりで、たきのしぶきに当たってかがやいています。^③ 春をむかえた喜びが、かろやかな水音と光の中で、生き生きとうたわれています。

〈教科書書きおろしによる〉

(1) Aの短歌に使われている表現方法を次の中から

全て選び、記号で答えましょう。

ア くり返し イ 体言止め

ウ 倒置法 エ 擬人法

(2) 線①「光の粒」とは、どのような様子を表

していますか。その様子を説明した次の文の

□ A・Bにあてはまる言葉を、Aは文章なか

ら三字でぬき出し、Bは十字以内で考えて答えま

しょう。
日ざしがふり注ぐ川面に □ A が立ち、 □ B
いる様子。

(3) 線②「おだやかな川風」とありますが、川

風がおだやかであることを表している言葉を、A
の短歌の中から三字でぬき出しましょう。

(4) 線③「春をむかえた喜び」とありますが、

作者は何を見て春を感じているのですか。Bの短
歌の中からぬき出しましょう。

(5) AとBの短歌には共通して感じられる音があり

ます。それは何の音ですか。漢字一字で答えましょ
う。

【三】 次の短歌と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

海恋し 潮の遠鳴り かぞへては

少女となりし

父母の家

与謝野 晶子

【鑑賞文】

ふるさとはなれ、都会ぐらしをするようになってから、ひさしいのです。ふるさとの海を、こいしくおもわずにはいられません。

わたしの家は、浜べにほど近いところにありました。風が潮のかおりをはこんできて、浜にうちよせる波の音がいつもきこえていました。

A、ゆめみるような少女のころをすごしたのでした。海のようにふかい父と母の愛をうけて、育ったふるさとなのです。

——生まれ育ったふるさとは、人それぞれになつかしい思い出があります。作者にとっては、こ

15

10

5

とに潮鳴りの音が、子守りうたのように、そしてまた少女をつつみこむやさしい音楽のように、こころにひびいたのでしょう。都会にいても、その音がきこえてきたことでしょう。

はじめに「海恋し」といいきって、ふかいおもいをあらわしました。

〈桜井信夫「はじめてであう短歌の本【心の歌Ⅱ】より〉

20

(1) — 線「海恋し」とありますが、短歌の作者は、なぜこのように感じたのですか。鑑賞文の中の言葉を使って答えなさい。

(2) 鑑賞文の A に入る表現としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア そのよせる波を見つめながら
 イ そのよせる波をかぞえながら
 ウ その潮鳴りの音をききながら
 エ その潮鳴りの音をおもいうかべながら

(3) この短歌の説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 都会ぐらしを感じさせる言葉を用いて、ふるさとの生活と対比^{たいひ}させている。

イ 子守りうたを「潮の遠鳴り」にたとえて表現している。

ウ 潮のかおりを表した言葉がたくさん使われている。

エ 短歌の最初に言い切りの表現を使って、ふるさとへの深い思いを表している。

【四】 次の短歌と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

① ガレージへ トラツクひとつ 入らむとす
ツ

少しためらひ ② 入りて行きたり
い ん

斎藤 茂吉
さいとう もきち

【鑑賞文】

まちなかを歩いていると、ちょうど、トラツクがガレージ（車庫）へもどってきたところに、であいました。

いったん路上にとまったトラツクは、バックして、ガレージにはいろうとします。それがいかにも、これでだいじょうぶかな、ぶつけずにバックできるかな、と、AがBのようにためらってから、すすつとはいったのです。

それを見とどけて、なんとなく、あれでいいんだなど、また歩きだしました。

—— 作者は、トラツクそのものに、じぶんの気
②

15

10

5

持ちをうつしこんでいます。それが「少しためらひ」のことばとしてあらわされました。この歌がよまれたころは、「ガレージ」も「トラツク」も、あたらしいことばでした。短歌にはなりにくいような情景を、うつしとったのです。

〈桜井信夫「はじめてであう短歌の本【心の歌Ⅱ】より」〉
さくらい のぶお

20

(1) 線① 「ガレージへ トラックひとつ 入ら

むとす」とは、どのような様子をあらわしていますか。鑑賞文の中の言葉を使って答えなさい。

(2) 鑑賞文の A ・ B に入る言葉の組み合わせ

せとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|--------|--------|
| ア | A トラック | B 生きもの |
| イ | A トラック | B 機械 |
| ウ | A ガレージ | B 生きもの |
| エ | A ガレージ | B 機械 |

(3) 線② 「じぶんの気持ち」とありますが、作

者はこの短歌にどのような気持ちをうつしこんだのですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しいものへのおどろきや感動を、読み手に伝えたい気持ち。

イ 新しいものが町にあることへのためらいを、読み手に伝えたい気持ち。

ウ 新しい言葉を使って短歌をよむことを楽しむ気持ち。

エ 新しい言葉を使って短歌をよんでいいものか、迷う^{まよ}気持ち。

第十七講・確認テスト

次の表現技法として正しいものを選びなさい。

1 ものごとをたとえることをなんでしょうか。

- ア 反復法
イ 比喩
ウ 倒置法
エ 連

2 同じ言葉をくり返すことをなんでしょうか。

- ア 反復法
イ 比喩
ウ 倒置法
エ 対句

3 言葉の順番を逆にすることをなんでしょうか。

- ア 比喩
イ 擬人法
ウ 倒置法
エ 対句

4 人でないものを人にたとえることをなんでしょうか。

- ア 比喩
イ 擬人法
ウ 倒置法
エ 対句

5 詩の一つのかたまり（文章でいう段落）のことをなんでしょうか。

- ア 比喩
イ 対句
ウ くり返し法
エ 連

第十八講・短歌②、俳句

一 次の和歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行

B 五月雨の晴れ間にいでて眺むれば

青田すゞしく風わたるなり

良寛

C 駒とめて袖打ちあらふかげもなし

さこのわたりの雪の夕暮

藤原定家

(注) 駒＝馬のこと。

10

5

(1) Aの歌の——線「さやかに見えねども」の意味として最もふさわしいものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア さわやかには見えなけれど

イ 静かな感じに見えるけれど

ウ だんだんはつきりと見えてきたけれど

エ はつきりとは見えなけれど

(2) Bの歌を、五・七・五・七・七の句ごとに／の

印を入れて区切りなさい。

五月雨の晴れ間にいでて眺むれば
青田すゞしく風わたるなり



(3) Cの歌は、色彩の対照が美しい歌です。何の色と何の色ですか。最もふさわしいものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

ア 茶色の駒と真っ白い雪の野原

イ 馬に乗る人の黒い姿と真っ白い雪の野

ウ 赤く染まった夕焼けの空と辺り一面の雪

エ 遠くの山の緑と真っ白い雪の野原

二 次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A みちのくの母のいのちを 一目見ん

一目みんとぞ いそげる

斎藤茂吉

B 夏の風山より来たり三百の

牧の若馬耳ふかれけり

与謝野晶子

5

C ② くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の

針やはらかに春雨のふる

正岡子規

D 晴れし空あおげばいつも

口笛をふきたくなりて

ふきてあそびき

石川啄木

(1) Aの歌について、次の問いに答えなさい。

① 線①「一目見ん一目みん」には、作者

のどのような気持ちが表示されていますか。「

気持ち。」に続く形で答えなさい。

気持ち。

② にあてはまる言葉として最もふさわ

しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たしかに イ なお

ウ ただ エ ただに

10

(2)

Bの歌について、次の問いに答えなさい。

この歌によまれている情景^{じやうけい}として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 山からおりてきたたくさんの馬たちが風にふかれている。

イ 夏山に登ってさわやかな風を受け、喜んでいる馬たち。

ウ 山からふくさわやかな夏風に、若馬たちは気持ちよさそうにふかれている。

エ 山からふく冷たい風に、身のひきしまる思いで作者も馬もふかれている。

☐

(3)

Cの歌について、次の問いに答えなさい。

②

——線②「くれなる」とはどんな色ですか。

最も近い色を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あわいピンク イ あざやかな黄緑

ウ こい赤 エ しずんだ黄色

☐

①

——線③「やはらかに」は、薔薇の新芽の様子を表していますが、そのほかに、もう

一つの意味があります。何の様子を表していますか。「〴〵様子」に続く形で答えなさい。

様子

(4) Dの歌について、次の問いに答えなさい。

④ — 線④「あおげば」の意味として最も

ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 見上げれば

イ 風を送れば

ウ 青ければ

エ 見つめると



① この歌の鑑賞文として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 快晴の日の空を見ているとかえって悲し

みが増し、口笛をふいてごまかしているさ

びしさが感じられる。

イ 毎日の苦勞を忘れさせてくれる青い空に

感謝の気持ち^{かんしや}をこめて口笛をふくおだやかな春の日が目^めにうかぶ。

ウ 晴れわたった青空を見ていると、口笛を

ふいて遊んだ少年のころがなつかしく思い出される。

エ 口笛が得意なので、みんなに聞かせたくなってもふいてしまう気持ちがよくわかる。

エ 口笛が得意なので、みんなに聞かせたくなってもふいてしまう気持ちがよくわかる。



俳句

俳句とは、江戸時代の中ごろに成立した世界で最も短い定型詩で十七音から成り、季語がよみこまれている。

柿^{かき}くへば 鐘^{かね}が鳴るなり 五 七 五
上^{うへ}の句 中^{なか}の句 下^{した}の句
法隆寺^{ほうりゅうじ}

- ・字余り^{あま} 音数が十七音より多くなること。
- ・字足らず 音数が十七音より少なくなること。

◆季語◆

季節を表す言葉。季節は旧暦^{きゅうれき}によって分けられていて、「歳時記^{さいじき}」にすべての季語がのっている。

春（一〜三月） のどか 彼岸^{ひがん} 霞^{かすみ} 朝寝^{あしな} つばめ かえる よもぎ 雪解^{ゆきとけ}
け 桜 たんぽぽ つくし
卒業 花見

夏（四〜六月）

梅雨^{つゆ}、五月雨^{さみだれ} 田植え 短夜夕立 葉桜^{わかば} 若葉^{わかば} いちごほたる うちわ 風鈴^{ふうりん}

秋（七〜九月）

天の川 七夕 名月 台風

赤とんぼ 雁^{がん} 朝顔 すいか

りんご 柿 もみじ すすき

冬（十〜十二月）

寒さ 大みそか 時雨^{しぐれ} こが

らし 七五三 ふとん 炭

風邪^{かぜ} クリスマス 落ち葉白菜 枯れ草^か

◆表現技法◆

- ・句切れ 意味や調子が切れる

名月や 池をめぐりて よもすがら

- ・切れ字 「や」「かな」「けり」など、句切れ

を起こすことば

【三】 次の文章と俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

俳句は、江戸時代、松尾芭蕉^{まつお ばしやう}がかつやくしたところ（三百三十年ほど前）にさかんになりました。五・七・五の十七音で作られ、季節を表す「季語」をよみこむ約束になっています。ただ、音数は、短歌の場合もそうですが、いくらか増減があってもかまわないことになっています。

A 古池や蛙飛びこむ水のおと
松尾芭蕉

〈教科書書きおろしによる〉



(1) Aの俳句の中から季語をぬき出し、その季節を答えましょう。

季語

季語

(2) Aの俳句はどのような光景をよんだものですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア 大きな池のほとりでの光景。
イ 静かな池のほとりでの光景。
ウ 美しい池のほとりでの光景。

(3) この文章で述べていることとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 短歌や俳句には季節を表す「季語」をよみこむ約束がある。

イ 短歌や俳句には音数のきまりがあるが、必ずしもその音数でなくてもよい。

ウ 『万葉集』が作られたのは千三百年以上も昔のことである。

エ 『万葉集』は松尾芭蕉により作られた歌集である。



四 次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 名月や池をめぐりてよもすがら

松尾芭蕉

あまりに月が美しいので、池をめぐりながら見とれていたらとうとう一晩過ごしてしまつたよ。

B 雪とけて村いっぱいの子どもかな

小林一茶

雪に閉じこめられていた長い冬がようやく終わり、春の陽ざしに、雪が段々ととけていく。子どもたちは待つてましたとばかり外に遊びを楽しみ始め、村は子どもでいっぱいになった。

C 赤とんぼ筑波に雲もなかりけり

正岡子規

D 夏の蝶日かげ日なたと飛びにけり

高浜虚子

15

10

5

(1) A・Bの句の季語と季節を答えなさい。

A 季語

季節

B 季語

季節

(2) C・Dの句の鑑賞文として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 色彩の対照が美しく、春ののびのびとした情景が思いうかぶ句。

イ 強い日ざしの快晴の夏の日、光の明暗を対照させた絵のような句。

ウ 秋の静けさが心にしみ、ふるさとへのなつかしさが伝わる句。

エ 秋晴れの澄んだ空が目にかぶさわやかな句。

オ

C

D

【5】 次の俳句と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

なさい。

A とどまれば ① あたりにふゆる蜻蛉かな

なかむらていじよ

中村汀女

【鑑賞文】

ふと立ち止まって空を見上げ、「まあなんと、こんなになくさんのとんぼが飛んでいるのだわ」という句です。歩いていたときにも、とんぼの飛んでいたことは知っていました。とは言え、池があり、秋の草花があちらこちらにさく名園ですから、ほとんどそのほうに注意が向けられていたのでしょう。立ち止まってはじめてとんぼの数多さに気がつき、まるで自分が立ち止まったために、とんぼが急にわき出してきたように感じたのです。

5

（鷹羽狩行「ジュニア版 目でみる日本の詩歌」⑮）

現代の俳句」より）

*名園 三溪園。横浜にある日本式庭園。作者がこの庭園をおとずれたときに作られた句。

15

B 海に出て木枯^{こがし}帰^{かへ}るところなし^②山口誓子^{やまぐちせいし}

【鑑賞文】

「木枯」は、秋の終わりに冬に掛けてふく、

20

北西寄りの季節風のことで。強い音をたてながら
ふきあれ、木々をふきからすことからこの名がつき
ました。冬の季語です。陸上をふきにふき、あれに

あれた木枯らしも、やがて海上に出た。からすもの
も、さえぎるものもない海上を、当てもなくどこま

25

でもふきわたっていく木枯らしには、もう、もどる
べきところがない……。 「帰るところなし」は木枯
らしを人のように見た表現で、これによって、やが
て消えうせるしかない木枯らしのなげきが、伝わっ
てくるようです。

30

(鷹羽狩行「ジュニア版 目でみる日本の詩歌」⑤)

現代の俳句「より」

- (1) Aの俳句に使われている切れ字をぬき出しなさい。

(2)

線①「あたりにふゆる蜻蛉かな」とありま

すが、なぜ作者は「蜻蛉」が「あたりにふゆる」と感じたのですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 庭園の中でも、とんぼが多くいる池のまわりを歩いているから。

I 作者の目は庭園の風景に向いていたので、立ち止まったときにはじめてとんぼの数の多さに気づいたから。

ウ 草花の中で立ち止まった作者におどろいて、蜻蛉が急にわき出してきたから。

エ 秋の草花を見て、はじめてとんぼが多く飛ぶ季節になったことに気づいたから。

(3)

——線②「帰るところなし」の説明として、鑑

賞文の内容にあてはまるものを次の中から一つ選
び、記号で答えなさい。

ア 木枯に対する人間の気持ちで、冬がやってき
て外へ出られないことへの不満を表している。

イ 木枯に対する人間の気持ちで、強い木枯で家
に帰ることができなくなる不安を表している。

ウ 木枯を人にたとえていて、海上に出てどこま
でも行ける木枯の自由さが感じられる。

エ 木枯を人にたとえていて、海上に出て行くあ
てのない木枯のさびしさが感じられる。



第十八講・確認テスト

次の言葉はいつの季語なのか答えなさい。

1 入学式

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

2 梅^{つゆ}雨

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

3 大根

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

4 天の川

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

5 雪解け

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

第十九講・大造じいさんとがん① (物語文)



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えま

しょう。

今年も、残雪^{ざんせつ}は、がんの群れ^むを率^{ひき}いて、ぬま地にやってきました。

① 残雪^①というのは、一羽のがんに付けられた名前です。左右のつばさに、一か所ずつ、真つ白な交じり毛を持っていたので、かりゅうどたちから、そうよ

5

ばれていました。残雪^②は、このぬま地に集まるがんの頭領^{どうりやう}らしい、なかなかりこうなやつで、仲間がえさをあさっている間も、油断^{だん}なく気を配って、りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした。

10

大造じいさんは、このぬま地をかり場^{かりば}にしていますが、いつごろからか、この残雪が来るようになってから、一羽のがんも手に入れることができなく

なったので、いまいましく思っていました。

そこで、残雪がやってきたと知ると、大造じいさんは、今年こそは、とかねて考えておいた、特別な方法に取りかかりました。それは、いつもがんのえさをあさる辺り一面にくいを打ちこんで、たにしを付けたうなぎばりを、たたみ糸で結び付けておくことでした。じいさんは、一晩中^{ひとばんじゅう}かかって、たくさんのうなぎばりをしかけておきました。今度は、何だかうまくいきそうな気がしてなりませ

③ んでした。

20

翌日^{よく}の昼近く、じいさんは、むねをわくわくさせながら、ぬま地に行きました。昨晚^{さくばん}、つりばりをしかけておいた辺りに、何かばたばたしているものが見えました。

25

「しめたぞ！」

じいさんはつぶやきながら、夢中^{むちゅう}でかけつけま

15

した。

〈棕鳩十^{むくはとじゅう}「大造じいさんとがん」より〉

30

(1) 線①「残雪というのは、一羽のがんに付けられた名前です」とありますが、残雪という名前が付けられたのはなぜですか。文章中の言葉を使って答えましょう。

(2) 線②「残雪は、このぬま地に集まるがんの頭領らしい」とありますが、残雪を頭領だと思ふ理由としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 常に仲間に気を配り、がんの群れを率いていたから。

イ このぬま地をかり場としたところからずっといるがんだから。

ウ ほかのがんに比べて体が一回り大きかったから。

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

がんの群れは、思わぬごちそうが四、五日も続いたので、ぬま地のうちでも、そこがいちばん気に入りの場所となったようでありました。

大造じいさんは、^①会心のえみをもらしました。

そこで、夜の間に、え場より少しはなれた所に、小さな小屋を作って、その中にもぐりこみました。そして、ねぐらをぬけ出して、このえ場にやってくる、がんの群れを待っているのでした。

あかつきの光が、小屋の中に、すがすがしく流れこんできました。

^②ぬま地にやってくるがん



15

10

5

のすがたが、かなたの空に、黒く点々と見えだしました。先頭に来るのが残雪にちがいありません。その群れはぐんぐんやってきます。

「しめたぞ！ もう少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは目にも物を見せてくれるぞ。」

りょうじゅうをぐつとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほど引きしまるのでした。

ところが、残雪は、油断なく地上を見下ろしながら、群れを率いてやってきました。そして、ふと、いつものえ場に、昨日までなかった、小さな小屋をみとめました。

「^③様子の変わった所に近づかぬがよいぞ。」

かれの本能は、そう感じたらしいのです。ぐつと急角度に方向を変えると、その広いぬま地の、ずつと西側のはしに着陸しました。

もう少しで、たまのどくきよりに入ってくるというところで、^④またしても、残雪のために、してやられてしまいました。大造じいさんは、広いぬま

35

30

25

20

地の向こうをじっと見つめたまま、

「ううん。」

どうなっていましたか。

今年もまた、ぼつぼつ、例のぬま地にがんの来る季節になりました。

大造じいさんは、生きたどじょうを入れたどんぶりを持って、鳥小屋の方に行きました。じいさんが小屋に入ると、一羽のがんが、羽をばたつかせながら、じいさんに飛びついてきました。

このがんは、二年前、じいさんがつりばりの計略^⑤で生けどったものだったのです。今では、すっかり、じいさんになついていた。ときどき、鳥小屋から運動のために外に出してやるが、ヒュ、ヒュ、ヒュと口笛をふけば、どこにいても、じいさんの所に帰ってきて、そのかた先にとまるほどに慣れていました。

大造じいさんは、がんがどんぶりからえさを食べているのを、じっと見つめながら、

50

45

40

「今年^⑥は、ひとつ、これを使ってみるかな。」

と、独り言^{ひとご}を言いました。じいさんは、長年の経験で、がんは、いちばん最初に飛び立ったものの後に、ついて飛ぶ、ということを知っていたので、この^⑦がんを手に入れたときから、ひとつ、これをおとりに使って、残雪の仲間をとらえてやろうと考えていたのです。

〈椋鳩十「大造じいさんとがん」より〉

60

55

[illegible]

(6)

線⑤ 「すっかり、じいさんになつていました」とありますが、じいさんになついている様子がえがかれている文を二つぬき出し、それぞれ初めと終わりの五字を答えましょう。(、や。も一字に数えます。)

(7)

線⑥ 「今年は、ひとつ、これを使ってみるかな」とありますが、じいさんは、がんのどのような特性を利用しようと考えたのですか。「〜という特性。」に続くように文章中からぬき出しましょう。

という特性。

(8)

線⑦ 「このがん」とは、どうやって手に入れたがんですか。文章中の言葉を使って答えましょう。

第十九講・確認テスト

次の言葉はいつの季語なのか答えなさい。

1 入道雲

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

2 桜

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

3 小春日ひより和

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

4 赤とんぼ

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

5 名月

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

第二十講・大造じいさんとがん② (物語文)



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えま

しょう。

がんの群れ^むを目がけて、白い雲の辺りから、何^①か一直線に落ちてきました。

「はやぶさだ。」

がんの群れは、残雪^{ざんせつ}に導^{みび}かれて、実にすばやい動作で、はやぶさの目をくらませながら、飛び去っていきます。

「あー」

一羽、飛びおくれたのがいます。大造じいさんのおとりのがんです。長い間飼^かい慣^ならされていたので、野鳥としての本能^{のう}がにぶっていたのでした。

はやぶさは、その一羽^②を見のがしませんでした。

じいさんは、ピュ、ピュ、ピュと、口笛をふきました。こんな命^③がけの場合でも、飼^かい主のよび声

10

を聞き分けたとみえて、がんは、こっちに方向を変えました。

はやぶさは、その道をさへぎって、ぱあんと、一けりけりました。ぱっと、白い羽毛が、あかつきの空に光って散りました。がんの体は、ななめにかたむきました。もう一けりと、はやぶさがこうげきの姿勢^{しせい}をとったとき、さっと、大きなかげが空を横切りました。残雪です。

大造じいさんは、ぐっと、じゅうをかたに当てて、残雪をねらいました。が、何^④と思っただか、また、じゅうを下ろしてしまいました。

残雪の目には、人間もはやぶさもありませんでした。ただ救わねばならぬ、仲間のすがたがあるだけでした。いきなり、敵^{てき}にぶつかっていききました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなくりつけました。

〔椋鳩十「大造じいさんとがん」より〕

25

20

15

文章中から十三字でぬき出しましょう。

[illegible]

た」とありますが、その理由としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましよう。

ア 自分の力では、残雪をうつことはとても無理だと思ったから。

イ 残雪のすばやさに、どうしてもねらいが定まらなかつたから。

ウ 残雪が、おとりのがんを助けようとしている

ことに気づいたから。

工 残雪とはやぶさの戦いを、じっくり見物しよ
うと思ったから。

10

(4) この文章の持ちようを述べたものとして、つと

もふさわしいものを次の中から選び、記号で答え
ましよう。

ア 出来事を、時間の経過けいこにしたがつて細かく表現している。

イ 大造じいさんの心の動きを、いねいに表現している。

ウ 大造じいさんのおとりのがんとはやぶさの戦ひょうげんう様子を、力強く表現している。

11

二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

残雪の目には、人間もはやぶさありませんでした。ただ救わねばならぬ、仲間のすがたがあるだけでした。いきなり、敵にぶつかっていききました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい^① 相手をなぐりつけました。

5

不意を打たれて、さすがのはやぶさも、空中でふらふらとよろめきました。が、はやぶさもさるものです。さっと体勢を整えると、残雪のむなもとに飛びこみました。

ぱっ

10

ぱっ

羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。そのまま、はやぶさと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていききました。

大造じいさんはかけつけました。二羽の鳥は、なおも地上ではげしく戦っていました。が、はやぶさ

15

は、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よろめきながら、飛び去っていききました。

残雪は、^② むねの辺りをくれないにそめて、ぐつ

たりとしていました。しかし、^③ 第二のおそろしい

20

敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐつと長い首を持ち上げました。そして、じいさんを正面からにらみつけました。それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました。

25

大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もう、じたばたさわぎませんでした。最期^{さいご}のときを感じて、せめて、頭領としてのいげんをきずつけまいと努力しているようでもありました。大造じいさんは、^④ 強く心を打たれて、ただの鳥に對しているような気がしませんでした。

30

残雪は、大造じいさんのおりの中で、一冬をこしました。春になると、そのむねのきずも治り、体力も元のようにになりました。

ある晴れた春の朝でした。

⑤ じいさんは、おりのふたをいっばいに開けてやりました。残雪は、あの長い首をかたむけて、とつぜんに広がった世界におどろいたようでありました。が、バシッ！

快い羽音一番。一直線に空に飛び上がりました。

らんまんとさいいたすももの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。

「おうい、がんの英ゆうよ。おまえみたいなえらぶつを、おれは、ひきょうなやり方でやつけたかないぞ。なあ、おい、今年の冬も、仲間を連れてぬま地へやってこいよ。そうして、おれたちは、



50

45

40

35

また、堂々と戦おうじゃあないか。」

⑦ 大造じいさんは、花の下に立って、こう、大きな声で、がんによびかけました。そうして、残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、はればれとした顔つきで見守っていました。

⑧ いつまでも、いつまでも、見守っていました。

〈むくはとじゅう 椋鳩十「大造じいさんとがん」より〉

55

(1) 線① 「相手」とは、だれ(何)ですか。

--

(2) 線② 「むねの辺りをくれないにそめて」と

ありますが、これはどんな様子を表していますか。
次の中からもっともふさわしいものを選び、記号
で答えましょう。

ア 残雪が大きなけがをしている様子。

イ 残雪が戦いに勝った様子。

ウ 残雪が非常に興^{こう}ふんしている様子。

--

(3) 線③ 「第二のおそろしい敵」とはだれ(何)ですか。

--

(4) 線④ 「強く心を打たれて」とありますが、

大造じいさんは残雪のどんな様子に「強く心を打
たれ」たのですか。文章中の言葉を使って、
二十五字以内で答えましょう。

(5) 線⑤ 「じいさんは、おりのふたをいっぱい

に開けてやりました」とありますが、何のために
そうしたのかを述べた次の理由のうち、ふさわし
くないものを選び、記号で答えましょう。

ア 残雪の仲間をよび寄^よせるおとりにするため。

イ 残雪を仲間のところへ帰すため。

ウ 残雪とまた今年の冬、堂々と戦うため。

--

(6) — 線⑥「雪のように清らかに」は、何のどんな様子を表していますか。

(7) — 線⑦「花」とありますが、どんな「花」ですか。文章中から十三字でぬき出しましょう。

[illegible]

(8) — 線⑧「いつまでも、いつまでも、見守って
いました」とありますが、このときの大造じいさ
んの気持ちとしてもつともふさわしいものを次の
中から選び、記号で答えましょう。

ア これでまたいつか、残雪が仲間を連れてもどってくれば、今度こそこちらの力を見せてやれる、と期待する気持ち。

イ いっしょに一冬を過ごしたことで別れをつらく思いながらも、残雪の無事をいのるやさしい気持ち。

ウ 強力な敵を助けてやったことの満足感と、残雪のすばらしさをたたえる気持ち。

7

第二十講・確認テスト

次の□に当てはまる身体の一部を入れ、慣用句を作りなさい。

1 □が出る——お金が足りなくなること

ア 手 イ 足 ウ 頭 エ 目

2 □が軽い——おしゃべりであること

ア ロ イ 手 ウ 足 エ 鼻

3 □が空く——時間がでること

ア 足 イ 頭 ウ 手 エ ひざ

4 □にかける——我慢すること

ア 鼻 イ 手 ウ 足 エ 首

5 □をたてにふる——うなずくこと

ア 手 イ 足 ウ 頭 エ 首

第二十一講・宮沢賢治①（伝記）



一題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

宮沢賢治は、自分の理想とする世界を求めてはげしく燃え続けた、太陽のような人であった。人間も動物も自然も一つになって、心を通い合わせることのできる「まことの幸せ」がどこかにありはしないかと、生涯をかけてさがそうとした。

5

そのためには、自分の肉体がどうなってもいいと考えた。教師になって、自分の理想を説き、自ら農民になって土に生きる者の悲しみを知ろうとした。しかし、理想と現実とはあまりにもちがいがすぎた。宗教に学んでも、自然のふところに飛びこんでも、賢治のはげしい思いをとげることはできなかった。それならば、せめて童話の中で自分の夢を実現したいと、身をけずる思いで作品を書き続けた。

10

賢治童話の舞台は、目の前の林や野原であったり、風のふく山の中であったり、星のかがやく夜空であったり、いつもわたしたちの身近にある場所だ。それでいて、わたしたちをたちまち不思議な世界へ運びこんでくれる。まるで昔話のように、人も動物も精霊もいっしょになって登場する。

15

「ざしき童子のはなし」という短い童話がある。だれもいない家の中で、ほうきを使う音が聞こえてきたり、子どもたちが遊んでいると、いつのまにか一人増えていたりする話だ。こんなそばく話でも、幸せをよぶざしき童子に住みついてほしいと願う農民の思いがいきいきと伝わってくる。

25

〔西本鶏介「宮沢賢治」より〕

(1) 筆者は、宮沢賢治をどんな人だと考えていますか。それが分かる部分を文章中からぬき出し、初めと終わりの五字を答えましょう。

(2) 線①「理想と現実」とありますが、「理想」と「現実」のそれぞれについて分かる一文の、初めの三字を文章中からぬき出しましょう。

理想

現実

(3) 賢治が童話を書き続けたのはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

- ア 理想を説きながら農民とともに生活をした現実を、童話の世界で表現したかったから。
- イ 理想の世界と現実の世界のちがいを体験し、童話の中で理想とする世界を実現したかったから。

ウ 理想と現実のちがいを童話にしたいというはげしい思いがあったから。

--

(4) 線②「賢治童話」とは、どのような童話ですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア 身近な場所が舞台だが、どこか不思議な童話。

イ 身近な昔話のように、どこにでもあるそばくな童話。

ウ 身近な場所に精霊などが登場し、少しこわい童話。

--

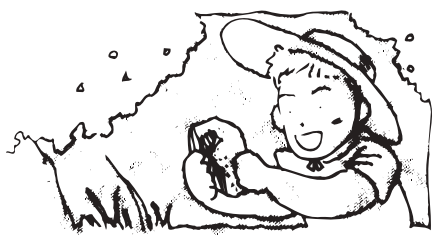
二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

賢治は、植物や石ころを集めるのが大好きな少年であった。盛岡中学校へ通うようになると、独りで岩手山へ登り、植物や鉱石を採集しながら、自然のきびしさと豊かさを学んだ。

① 中学を卒業しても、賢治には自然のみりよくがわすれられなかった。このまま家にいて、父の仕事を手伝おうという気持ちが出てこないのだ。そのころ、たまたま読んだ宗教の本に深く感動した賢治は、店のあとをつぐより、いつか世の中のためになる仕事したいと考えるようになった。

一九一五年（大正四年）、賢治は、盛岡高等農林学校へ進学すること
を父から許された。中学時代に続き、野山をかけめぐり、地質や土の科学調査と実験に打ちこんだ。



15

10

5

賢治は、学校にもどると実験室にとじこもり、帰った石のかけらや土をけんび鏡で調べた。単調な仕事にあきてくると、賢治は仕事のことをわすれて、石や土の不思議な模様をながめた。

② 「命のないものでも、こんなにすばらしい美しさを
持っている。」

それは、美しい空想となって、どこまでも広がっていく。

（この美しさを文章にすることができたら、どんなにすてきだろう。）

賢治は、急に童話を書いてみたくなった。③ その気持ちに詩にうたいたいくなった。童話の中では、現実にできないことがいくらかでもできる。現実には見えないものまで見ることができる。動物も人間も自由に言葉がかわせる。だれもが仲良くくらせる理想的な世界だ。つくることができる。こうして、賢治は童話を書き始め、心にうかがふ思いを詩に書いた。

〈西本鶏介「宮沢賢治」より〉

30

25

20

(1) 賢治はどのような少年でしたか。文章中からぬき出しましょう。

(2) — 線①「中学を卒業」したころ、賢治はどのようなことを考えるようになりましたか。文章からぬき出しましょう。

(3) 賢治が(2)のように考えるようになったのは、どんなことがあったからですか。文章中の言葉からぬき出しましょう。

から。

(4) — 線②「命のないもの」とは、ここでは何を指していますか。文章中から三字でぬき出しましょう。

(5) — 線③「その気持ち」とは、どんな気持ちですか。文章中の言葉を使って答えましょう。

(6) 賢治は童話を書くことで、どのようなことができると思ったのですか。それが分かる部分の初めと終わりの十字をぬき出しましょう。(、や。も一字に数えます。)

第二十一講 ● 確認テスト

次の□に当てはまる身体の一部を入れ、慣用句を作きなさい。

1 □が立つ——めんぼく面目が立つこと

ア 頭 イ 体 ウ 顔 エ 足

2 □が早い——うわさなどをすぐに聞きつけること

ア 耳 イ 口 ウ 足 エ 目

3 □がうまい——だますのが上手なこと

ア 鼻 イ 口 ウ 目 エ 耳

4 □が黒い——心に悪たくみがあること

ア した イ 心 ウ 胸むね エ 腹はら

5

□が棒ぼうになる——つかれはててしまうこと

ア 足 イ 手 ウ ひじ エ 目

第二十二講

宮沢賢治② (伝記)



一題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えま

しよう。

その後、一九二一年（大正十年）、稗貫農学校ひえぬきの教師きょうしになったが、童話や詩を書けば書くほど、きびしい自然の中で生きる農民①たちへの熱い思いがわいてくる。

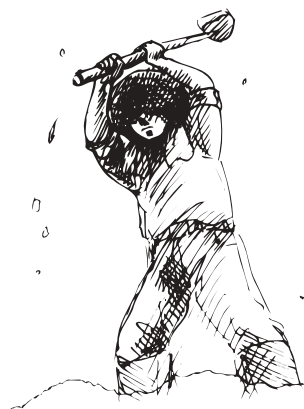
（教師として、生徒たちをりっぱに育てることも大切な仕事である。だが、それだけで、本当の農民の苦しみは分からない。雨がふれば、大水で田んぼが流され、日照りが続けば、いねがかれるのをじっと見ているほかにどうすることもできない人たち。その人たちのことを思うと、このまま教師をしてはいられない。その人たちといっしょになつて働き、その人たちのために、今すぐ役立たなくてはならないのだ。）

10

そう思うと、もうがまんができなかった。一九二六年（大正十五年）、賢治は、校長や両親の止めるのをふり切つて、きっぱりと教師をやめ、自ら農民として生きることを決心した。

賢治は、北上川きたがみのほとりの、林に囲まれたおかの上の家に、独りひとで住むことにした。この家は、妹のとし子が静養をしていた所である。とし子がなくなった後、ずっと空き家になっていた。

賢治は、大工さんにたのんで、いたみかけた土台を取りかえ、階下の部屋を造りかえてもらった。ここへ農民たちを集めて、新しい未来について話し合おうというのだ。二階は書きいにして、農作業のできない日は、読



25

20

書をしたり文章を書いたりすることにした。

賢治は、この家にこしてくると、さつそくあれた土地を切りひらいて畑を作り、なす、かぼちゃ、きゅうり、トマトなどのなえを植えた。朝は暗いうちに起きだし、夜おそくまでどろまみれになって働いた。食べる物といえは、げん米とみそしると野菜ぐらいなもので、肉類はいつさい口にできなかった。ふろに入る代わりに、いど水で体をふいた。

② こんなくらしをしていると、農民たちの苦勞がいたいほどによく分かる。賢治にとっては、これまでのどんな生活よりもすばらしいもの^{よくばう}に思えてくる。この生活からは、人間のみにくい欲望^{よくばう}はいつさいわいてこない。自然のふどころにだかれて、宗教^{しゅうきやう}の教えを守り、農民たちのためにつくすだけである。

ある日、農学校の卒業生が、この家にたずねてきたとき、賢治は



45

40

35

30

破れたシャツ一枚^{まい}でねむっていた。うでは、ぶゆにくわれてはれあがり、足首には、くわで切った傷口^{きずぐち}があった。それなのに包帯もせず、ヨードチンキがぬってあるだけだ。

(どうして、こんなにまでして、自分自身を苦しめるのだろうか。)

卒業生は、賢治の変わり果てたくらしぶりにおねがいっぱいになった。やがて、目を覚ました賢治に、卒業生が言った。

「先生、その傷口からばいきんでも入ったらどうするのです。」

③ すると、賢治は、わざと傷口をたたいてみせ、「だいじょうぶ。おかげで、わたしも一人前の農民になることができそうだ。初めは、一時間も働く^{はたら}と体がいたくてたまらなかったが、今じゃ何時間も働いても平気です。」

と言った。

〔西本鶏介「宮沢賢治」より〕

65

60

55

50

(1) 線①「農民たちへの熱い思い」とありますが、どのような思いですか。次の中からもっとも

ふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア きびしい自然の中で働いてくれている農民への感謝の思い。

イ きびしい自然の中で苦勞している農民たちのために何かをしたいという思い。

ウ きびしい自然に立ち向かっている農民たちの生き方にあこがれる思い。

(2) 賢治が教師をやめたときの気持ちとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 教師がいやでたまらず、自由になりたいという気持ち。

イ 自分には教師の仕事は向いていないとあきらめる気持ち。

ウ 教師も大切だが、自分は農民になり、農民のために働きたいという強い気持ち。

(3) 教師をやめた賢治は、どこにある家に住みましたか。文章中からぬき出しましょう。

(4) 賢治は、次の部屋をどのような部屋として使おうとしましたか。それぞれ答えましょう。

② 階下の部屋

③ 二階の部屋

(5)

線② 「こんなくらし」とありますが、賢治

はどのようなしをしていたのですか。次の点について、それぞれ二つずつ簡単に答えましょう。

④ 賢治の働きぶりについて

賢治の衣食住について

(6)

(5)のようなくらしを、賢治はどのように考えていますか。文章中から二十字以内でぬき出しなすう。

(7)

線③「わざと傷口をたたいてみせ」たのは、

なぜですか。次の中からふさわしくないものをつ選び、記号で答えましょう。

心配する卒業生を安心させたかったから。

イ 卒業生の言うことをばかっていると思ったから。

ウ 自分が一人前の農民に近づいたと示したかつたから。

第二十二講 ● 確認テスト

次の□に動物を入れてことわざを完成させなさい。

1 □も歩けば棒に当たる

ア 犬 イ ねこ ウ 豚 エ 牛

2 □をかぶる

ア 犬 イ ねこ ウ 鳥 エ 魚

3 月と□

ア かめ イ つる
ウ どじょう エ すっぱん

4 泣きつ面に□

ア かぶと虫 イ はち
ウ みみず エ ちょうちよ

5 □の耳に念仏

ア 牛 イ 馬 ウ 犬 エ ねこ

第二十三講・人間の覚悟（説明文）



一 題目 次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

①「登山」という言葉を聞くと、私はいつも不完全

な言葉のような気がします。なぜなら、登山した人は必ず下山をします。登ったきりで終わるわけではなく、山登りには必ず山下りというのがある、登山に成功したなら今度は安全に下界までたどりつ

5

てはじめて「登山が成功」したことになるからです。

登頂することだけが、登山の目標ではない。きち

んと安全かつ優雅に山を下っていくことが、人間

にとって大切なのだと私は思います。

重い荷物を背負ってひたすら頂上をめざしている

10

最中は、下界をふりかえる余裕もなく勢いをつけて必死で登っていく。そこには、やがてあの峰に登れるのだと思える喜びがあります。しかしまた下りて

いくときには、何かを達成したという満足感と心のゆとりがうまれていくはずだ。

ゆったりと下界を眺めると、遠くに海が、あるいは北アルプスが、町並みが見えたりもする。「ああ、

あれはあんなところにあつたのか」と眼下の世界を

*俯瞰しながら、自分の足元に目を移すと、高山植

物が綺麗な花をつけている。「よくもこんな高いと

ころで、可愛い、美しい花をつけるものだな」

20

と小さな花を*めでたり、思いもかけず雷鳥を目にして、うれしくなったりするのだらうと思うのです。

〈五木 寛之「人間の覚悟」より〉

*俯瞰＝高いところから見おろすこと。

*めでる＝美しさを味わい楽しむこと。

15

(1) — 線①『登山』という言葉を……気がします」

とありますが、筆者はなぜ「不完全な言葉」と感じるのですか。それを説明した次の文の□□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

「登山」とは

だけでなく、安全

に ができて、はじめて成功した

ことになる、筆者は考えているから。

(2) — 線②「登山の目標」とありますが、筆者の

考える『登山の目標』としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山の頂上めざして、ひたすら勢いよく登ること。

イ 山の頂上に登れなくても、安全に下りてくること。

ウ 山の頂上に登れなくても、優雅に下りてくること。

エ 山の頂上に登り、安全かつ優雅に下りてくること。

(3) — 線③「優雅に山を下っていく」とは、具体的に

にはどうすることですか。ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何かを達成したという満足感をもって山を下りること。

イ 周りの景色を見る心のゆとりをもって山を下りること。

ウ 周りの景色を見る余裕もなく急いで山を下りること。

エ 美しい花やめずらしい鳥をめでながら山を下りること。

(4) この文章の要旨^{ようし}としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登山の成功とは、周囲の景色を眺めながら登頂することである。

イ 登山の成功とは、頂上に登り、無事に下山することである。

ウ 達成感と満足感を得るためには、登山をすべきである。

エ 心に余裕のある人だけが、登山に成功するこ
とができる。



二題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

そろそろ覚悟^{かくご}をきめなければならない。

最近、しきりにそんな切迫^{せつぱく}した思いがつよまってきた。

以前から、私はずっとそんな感じを心の中に抱^{いだ}いて、日をすごしてきた。しかし、このところ、もう躊躇^{ちゅうちよ}している時間はない、という気がする。

いよいよこの辺で覚悟するしかないな、と諦^{あきら}める覚悟がさだまってきたのである。「諦める^①」という

のは、投げ出すことではないと私は考える。「諦める^②」は、「明らかに究める^{きわ}」ことだ。はつきりと現実^{げんじつ}を見すえる。期待感や不安などに目をくもらせることなく、事実を真正面から受けとめることである。

では、「諦める」ことで、いったい何が見えてくるのか。

「絶望^{ぜつぼう}の虚妄^{きよもう}なることは、まさに希望^{きぼう}と相同^{あひおな}じい」と、魯迅^{ろじん}は言った。絶望も、希望も、ともに人間

15

10

5

の期待感である。その二つから解放^とされた目だけが、「明らかに究める」力をもつのだ。

〈五木 寛之^{いっき ひろゆき}「人間の覚悟^{かくご}」より〉

*躊躇^{ちゅうちよ}＝ためらうこと。

*虚妄^{きよもう}＝うそ。真実ではないこと。

(1) 線①「諦める」とありますが、筆者の考える「諦める」としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 途中で投げ出さないこと。

イ はっきりと現実を見ずえること。

ウ 期待感や不安などに目をくもらせること。

エ 事実を真正面から受けとめること。

☐

(2) 線②「明らかに究める」とありますが、「明らかに究める」力をもつものとは何ですか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出さない。

人間の□である□や□から解き放たれた□。

(3) この文章の要旨としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、最後まで人生を諦めずに努力することとが大切だ。

イ 人生は短いので、ためらわずに行動することが必要だ。

ウ 人間には、くもりのない目で現実を直視する覚悟が必要だ。

エ どんなときも生きる望みを失わないでいる覚悟が大切だ。

☐

第二十三講 ● 確認テスト

次の□に動物を入れてことわざを完成させなさい。

1 一石二□

ア 虫 イ 鳥 ウ 牛 エ 馬

2 □にこばん

ア ねこ イ 犬 ウ 馬 エ 豚ぶた

3 飼い□に手をかまれる

ア ねこ イ 犬 ウ 馬 エ 豚

4 立つ□あとをにこさず

ア 馬 イ 犬 ウ ねこ エ 鳥

5 井いの中の□、大海を知らず

ア 魚 イ くじら
ウ 蛙かき エ いるか

第二十四講・花を食べる



一 題目

次の文章を読んで、あとの問いに答えな

さい。

湯飲み茶わんに、あわいピンクの八重桜やえぎの花がう
いている。桜湯である。めづたいことがあるときに、
お茶の代わりに飲むとされているが、きみたちは飲
んだことがあるだろうか。また、魚のさしみをもつ
た皿に、小さなきくの花が置いてあることがある。

5

これを食べたことがあるだろうか。あんなもの食べ
られるのかと思った人もいるだろう。あんなものど
ころか、そこには、日本人のちえがかくされている
のである。そのちえとはどんなものかさぐってみよ
う。

10

日本は、年間を通して花が絶たえることはない。そ
の花の多くを、日本人は昔から、実に上手に食べて

きた。どんな花を食べたかというと、桜やきくはも
ちろん、たんぽぽ、すみれ、つばき、ぼたんの花ま
で食べたのである。

15

きみたちのなかには、たんぽぽなら食べたという
経験けいけんの持ち主がいるかもしれない。その人は、きつ
と山菜や薬草に詳しい人が身近にいて、たんぽぽ
を使った料理をしてくれたのにちがいない。① たん

ぽぽの料理には、花びらとエビのすみそあえ、花の

20

てんぷらなどがある。また、わかい葉を使ったたん
ぽぽサラダや、根を使ったかきあげ、きんぴらがあ
る。おどろくことに、たんぽぽご飯やたんぽぽコー
ヒーもある。これらは、根を細かくきざんだものを
使う。

25

たんぽぽの花のてんぷらは、つんだばかりの花の
うら側に、うすい衣をつけて、油であげる。てんぷ
らにすると、花の苦みもうすくなっておいしい。花

を食べるといっても、わたしたちは、食べやすいようにいつそうのくふうをしているのである。これは、食べ方の A である。

では、花を食べることには、どんな意味があるのだろうか。

食べた花を調べてみると、花粉やみつには、リンや鉄、カルシウムのようなミネラル類や、ビタミン類が豊富にふくまれている。このため、花を食べることは、昔のそまつな生活のなかにあつて、きちょうな栄養分をとる一つの方法になっていたことがわかる。

そればかりではない。花を食べることを通して、日本人は、食べられる花と毒の花、うまい花とまずい花、体のためによい花と食べ過ぎるとよくない花などを、正確に区別してきた。

そして、区別とともに、^② それぞれの花に合う使い道を考えてきたのである。

まず第一は、薬として使う。ももの花やつぼみは、
にようがよく出るように。こぶしの花は、鼻の病氣

45

40

35

30

などを治すために。ふきのとうは、胃をじょうぶにするために、また、せきをしずめるために。

第二は、味として使う。つつじやさつきの花びらのすっぱい味。ふきのとうや菜の花の苦い味。花さんしょうのからい味。桜花や梅のつぼみのしぶい味など。

第三は、においとして使う。きく、桜、ゆず、しその花など、自然のかおりを楽しむ。

第四は、見た目を喜ばせるために使う。桜やももの花を湯にうかせて、その花ごと飲んだり、花びらの小さい花々を料理にそえたりする。

実際に豊かな使い方、味わい方だと言うことができよう。

現代のわたしたちが食べる花は、桜やきくのような伝統的なものばかりではない。たとえば、ニセアカシアの花をすすめる人は、あまくてみりよくのかおりと味を、年に一度は楽しみたいと言っている。てんぷらにしたり、バターいためにしたり、また、花をしごいて熱湯をかけ、サラダにしたりして食べ

65

60

55

50

ているそうである。

このように、花を食べる日本の伝統的なちえは、今日にも受けつがれ、さらに発展させられてもいる。

むろん、^③世界のどの国も、それぞれにすぐれた食文化をもっている。多くの花をいろいろな形で味わい、楽しむことは、日本人の育ててきたすぐれた食文化の一つである。それは、これからも生かしていくことが望まれるものである。

〈小泉 武夫「花を食べる」より〉

70

(1) 線①「たんぽぽの料理」として筆者が挙げ

ているものを次の中から全部選び、記号で答えな

さい。

ア 花のてんぷら イ 葉のコーヒー

ウ 根のかきあげ エ 葉のサラダ

オ 根のすみそあえ

(2)

A にあてはまる言葉を、文中から平仮名ニ

字でぬき出しなさい。

第二十四講 ● 確認テスト

次の熟語^{じゆくご}の組み立てとして正しいものを、あとからそれぞれ選^えびなさい。

- 1 通行
- 2 開会
- 3 青空
- 4 前後
- 5 乗馬

ア 似た意味の漢字を組み合わせたもの

イ 反対の意味の漢字を組み合わせたもの

ウ 上の漢字が下の漢字の意味をくわしくしているもの

エ 動作を表す漢字の下に「くを」「くを」という目的を表す漢字が来るもの

解答編

小学5年 国語 (基礎)

第一講 少年たちの夏① (物語文)

一 題目

(1) あ 六月にはいつてすぐの土曜日

① 学校からの帰り道

(2) ア

(3) 竹・一そう・いかだ

二 題目

(1) エ

(2) ア

(3) イ

解答 テキスト 基礎 国語 小5

〈確認テストの解答〉

1

イ

2

イ

3

ウ

4

イ

5

イ

一 題目

(1) A 才

B ア

(2) (例) 渦をぬけて、そとにうかんでいたから。

(3) イ

二 題目

(1) 満足していた

(2) A ア

B ウ

(3) どんなおとな

(4) (例) 圭造がちゃんとした人間かどうかは、ぼくが決めることではないと思っただから。

〈確認テストの解答〉

- 1 ウ 2 エ 3 イ 4 エ 5 エ

一
題
目

(1) 一 つ 目 1

二 つ 目 2

三 つ 目 3

(2) A ア 4

B オ 5

(3) 4

二
題
目

(1) 季節 タイム・スケジュール

(2) イ

(3) 来年・前年・花の芽

〈確認テストの解答〉

1 イ
2 ウ
3 エ
4 ア
5 ア

小 5 国語 基礎 テキスト 解答

一 題目

(1) 千三百年以上前（のもの）

(2) あ材料

い 木材の組み合わせ（木組み）

う 屋根を支える仕組み

え しなやかさ（しなやかだ）

(3) イ

二 題目

(1) はかいの力きしみ

(2) A エ

B ウ

(3) 全体がしなゝ強さを生む

〈確認テストの解答〉

- 1 ア 2 エ 3 イ 4 ア 5 ウ

1、主語と述語

1

(1) イ

(2) ウ

(3) ウ

2

(1) エ

(2) エ

(3) イ

3

(1) 主語…イ

(2) 主語…イ

(3) 主語…×

(4) 主語…エ

(5) 主語…エ

4

(1) 主語…ア

(2) 主語…エ

(3) 主語…×

(4) 主語…エ

(5) 主語…ウ

(6) 主語…×

2、修飾語

1

(1) ア・イ・ウ（順不同）
(2) ア・ウ・エ（順不同）

2

(1) ① 犬を

(2) ② かく

(3) ① ある

② わり引きが

(3) ① 顔を

② 見せる

3

(1) エ

(2) ア

(3) ウ

4

(1) ウ

(2) ア

(3) エ

〈確認テストの解答〉

1

ウ

2

エ

3

イ

4

ア

5

エ

一 題目

(1) あア

(2) いウ

(3) 木の芽

(4) 冬・春

二 題目

(1) ウ

(2) かなしみ

三 題目

(1) Aウ

(2) Bイ

(3) 倒置法

(4) イ・エ(順不同)

(5) 雲の悲しみがわかる

四 題目

(1) 夏休み・夕立

(2) ア・ウ(順不同)

(3) ウ

確認テストの解答

- 1 エ
- 2 エ
- 3 イ
- 4 エ
- 5 ア

一 題目

(1) だれが…恵（が）

どこへ…純子の家（へ）

(2) イ

(3) 白い自動車・かかえこんでとびのく

(4) ア

二 題目

(1) 八月十五日

(2) エ

(3) ありのままのこと

(4) (例) 自分は生きて帰れないだろうと思う気持ち。

(5) 例えば、自

〈確認テストの解答〉

- 1 ウ 2 ア 3 イ 4 エ 5 イ

一 題目

(1) ウ

(2) イ

(3) ア

(4) (あ) 検討すべき課題が多く残されている

(い) (例) 予想を大幅に上回る協力を得られた

〈確認テストの解答〉

- 1 エ
2 エ
3 イ
4 エ
5 エ

一題目

(1) ア

(2) ・飲み物の温度を保てる(から)
・自分に合った量を用意できる(から)

(順不同)

(3) 七月一日の

二題目

(1) 賛成

(2) イ

(3) ・(例)かん境に良いこと。

・(例)飲み物の温度を保てる(ものがある)こと。

・(例)ほかの人の飲み物とまちがえることがないこと。

(順不同)

(4) (例)わたしは、このろん題に反対です。

なぜなら、水とうを持つていくと、荷物が重くなるからです。校外学習は、おべんとうなど持ち物がたくさんあり、よゆうがありません。

だから、わたしは、校外学習に飲み物を持つていくときに、水とうを使うべきだとは思いません。

〈確認テストの解答〉

- 1 エ 2 エ 3 イ 4 ア 5 ア

一題目

- (1) おじいさん
 (2) さぬきのみやつこ
 (3) (例) 根元の光っている竹が一本あったこと。
 (4) イ
 (5) ウ

二題目

- (1) イ
 (2) 春の夜の夢・風にふき飛ばされていくちり
 (3) ウ
 (4) ア

三題目

- 解答 テキスト 基礎 国語 小5
 (1) 明け方(あけぼの)
 (2) イ
 (3) イ
 (4) をかし

四題目

- (1) (例) 春の明け方
 (2) 鳥の鳴き声
 (3) (例) 春のねむりがここちよかったから。
 (4) (例) 花は、いったい、どれくらい落ちたのだろうかということ。
 (5) ア

〈確認テストの解答〉

- 1 イ
 2 エ
 3 ア
 4 エ
 5 ア

小5 国語 基礎 テキスト 解答

③ イ ② ウ ① ア

⑤ イ ④ ア ③ ウ ② ア ① イ

③ イ ② ア ① ウ

① お登りになる
② お帰りになった
③ ご利用になった

① お聞きする
② お貸しした
③ おさがしする

① ①めしあがる(お食べになる・食べられる)
②いただく(食べます)
(2) おわたしする(差しあげる)

① ア ② ウ

① ①言います
② ②話です
③ ③感動しました

① ウ

1 イ
2 ア
3 エ
4 ウ
5 イ

〈確認テストの解答〉

一題目

(1) (例) 鳥もけものも一ぴきもないから。

(2) (例) 鉄ぼうでうつ音。

(3) イ

(4) 案内してきゝたぐらいの

(5) ア

(6) イ・ウ

二題目

(1) ただでござそうする

(2) (例) 太っていることと、わかいということ(の両方)。

(3) ウ

(4) ウ

(5) なかなかはやってる

小5	国語	基礎	テキスト	解答
1	エ	2	ア	3
ウ	4	イ	5	エ

確認テストの解答

一 題目

(1) ① ア・イ・エ

② ア・エ

(2) A ア

B エ

C イ

D ウ

E ア

F オ

(3) A 店（の主人）

B 二人

(4) あ イ

い エ

う ウ

二 題目

(1) ア

(2) (例) 部屋（戸）の中

(例) はらの中

(3) イ

(4) ウ

(5) ウ

(6) (例) 子分

(7) ・あとは、あなたがたと、菜っ葉をつまみ取り合わせて、真つ白なお皿にのせるだけです。

・そんならこれから火をおこしてフライにしてあげましょうか。

(8) 顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになり

(9) ⑧ 親分

⑨ 二人（のしんし）

〈確認テストの解答〉

1 イ 2 ア

3 ウ

4 イ

5 エ

一 題目

(1) 辞書・字引き

(2) ウ

(3) 初め……辞書のお
終わり……れない。

二 題目

(1) 道具・放ったらかし

(2) 説明・日常よく使われる

(3) イ

〈確認テストの解答〉

1

イ

2

ウ

3

ア

4

ウ

5

エ

小5 国語 基礎 テキスト 解答

① オ・ク
② ウ・カ
③ イ・エ
④ ア・キ

① ウ・ク
② ア・ケ
③ イ・カ
④ オ・キ
⑤ エ・コ

① 計測・豊富・絵画
② 夫妻・新旧・勝敗
③ 墓石・西洋・大群
④ 登山・退場・消火

① 計測・豊富・絵画
② 夫妻・新旧・勝敗
③ 墓石・西洋・大群
④ 登山・退場・消火

(それぞれ順不同)

① ア
② ア
③ ア
④ イ
⑤ イ

① イ
② ア
③ ア
④ イ
⑤ ア

① ウ
② エ
③ ア
④ ア
⑤ ア

① 委員
② 医院
③ 自信
④ 自身
⑤ 対象
⑥ 対照

① 物
② 者
③ 暑
④ 厚
⑤ 熱

① 物
② 者
③ 暑
④ 厚
⑤ 熱

1 エ 2 ア

④ ③ ② ③
付 着 早 速

3
イ
4
ア
5
工

一 題目

(1) イ

(2) (例) 曲自身が、変化がすくなくてつまらないから。

(3) エ

二 題目

(1) (あ) 第一交響曲の作曲（をしていたとき。）

(い) 和音が、高

(2) ア

(3) (例) スケッチした譜面を、ピアノでひいてみた音。

〈確認テストの解答〉

1 ウ

2 イ

3 ウ

4 イ

5 ウ

一

(1) 春

(2) 夜明けの光

(3) ① 秋

② ウ

(4) イ

二

(1) イ・エ

(2) A さざ波

B (例) きらきらくかがやいて

(3) なでる

(4) さわらび

(5) 水

解答 テキスト 基礎 国語 小5

三

(1) 海のあるふるさとはなれ、都会ぐらしをするようになってから、長い時間がたったから。

(2) ウ

(3) エ

四

(1) 路上にとまったトラック一台が、ガレージにはいるうとしている様子。

(2) ア

(3) エ

〈確認テストの解答〉

- 1 イ
- 2 ア
- 3 ウ
- 4 イ
- 5 エ

一

(1) エ

(2) 五月雨の／晴れ間にいでて／眺むれば／青田すゞしく／風わたるなり

(3) イ

二

(1) あ(例)母に早く会いたい(気持ち)

い エ

(2) ウ

(3) あ ウ

い(例)春雨がふる(様子)

(4) あ ア

い ウ

三

(1) 季語…蛙

季節…春

(2) イ

(3) イ

四

(1) A 季語…名月

季節…秋

B 季語…雪とけて

季節…春

(2) C エ

D イ

五

(1) かな

(2) イ

(3) エ

〈確認テストの解答〉

- 1 ア
- 2 イ
- 3 エ
- 4 ウ
- 5 ア

一 題目

(1) (例) 左右のつばさに、一か所ずつ、真っ白な交じり毛を持っていたから。

(2) ア

(3) あいまいましい(存在。)

(イ) (例) 残雪が来るようになってから、一羽のがんも手に入れることができなくなつたから。

(4) 翌日の昼近

二 題目

(1) イ

(2) (例) 夜明け(早朝)

(3) ほおがびりびりするほど引きしまる

(4) (例) (いつものえ場に、) 昨日までなかった小さな小屋があつた。

(5) ウ

(6) ・じいさんがゝきました。

・ときどき、ゝいました。

(じいさんふどう)

(順不同)

(7) (がんは、) いちばん最初に飛び立ったものの後について飛ぶ(という特性。)

(8) (例) (二年前に) つりばりの計略で生けどつたがん。

〈確認テストの解答〉

- 1 イ 2 ア 3 エ 4 ウ 5 ウ

一 題目

- (1) 大造じいさんのおとりのがん
- (2) 大造じいさん
- (3) ウ
- (4) ア

二 題目

- (1) はやぶさ
- (2) ア

(3) 大造じいさん（人間）

(4) (例) 最期さいごのときを感じても頭領とうりやうらしく堂々としている様子。

(5) ア

(6) (例) らんまんとさいたすもの花の、空中にまい散る様子。

(7) らんまんとさいたすもの花

(8) ウ

小5 国語 基礎 テキスト 解答

〈確認テストの解答〉

- 1 イ
- 2 ア
- 3 ウ
- 4 ア
- 5 エ

一 題目

(1) 自分の理想のよう人

(2) 理想…人間も

現実…宗教に

(3) イ

(4) ア

二 題目

(1) 植物や石ころを集めるのが大好きな少年

(2) (店)のあとをつぐより、いつか世の中のためになる仕事したい

(3) たまたま読んだ宗教の本に深く感動した(から)。

(4) 石や土

(5) (例) (石や土のような) 命のないものでも持つているすばらしい美しさを、文章にすることができたらどんなにすてきだろうと思う気持ち。

(6) 童話の中では、現実に現実にできないことが、つくることができる。

〈確認テストの解答〉

- 1 ウ 2 ア 3 イ 4 エ 5 ア

小5 国語 基礎 テキスト 解答

一 題目

(1) イ

(2) ウ

(3) 北上川のほとりの、林に囲まれたおかの上の家

(4) あ (例) 農民たちと新しい未来について話し合う部屋。

い (例) 農作業のできない日に読書をしたり文章を書いたりするための書さい。

(5) あ・(例) あれた土地を切りひらいて畑を作った。

・(例) 朝早くから夜おそくまでどろまみれになつて働いた。

い・(例) 食べる物は、げん米とみそしると野菜ぐらいだった。

・(例) ふろに入る代わりに、いど水で体をふいた。

各順不同

(6) これまでのどんな生活よりもすばらしい(もの)

(7) イ

〈確認テストの解答〉

- 1 ア 2 イ 3 エ 4 イ 5 イ

小5 国語 基礎 テキスト 解答

一 題目

(1) 山登り・山下り

(2) エ

(3) ウ

(4) イ

二 題目

(1) ウ

(2) 期待感・絶望・希望・目

(「絶望」「希望」の順番は逆でもよい)

(3) ウ

〈確認テストの解答〉

1

イ

2

ア

3

イ

4

エ

5

ウ

一 題目

(1) ア・ウ・エ(順不同)

(2) ちえ

(3) a ミネラル類

b ビタミン類

(4) ウ

(5) 多くの花をいろいろな形で味わい、楽しむこと

二 確認テストの解答

- 1 ア
2 エ
3 ウ
4 イ
5 エ